長者平遺跡

—昭和54年度緊急発掘調査概報—

1980

静岡県袋井市教育委員会

長者平遺跡

—昭和54年度緊急発掘調査概報—

1980

静岡県袋井市教育委員会

例　　言

1. 本概報は、国庫補助金・県費補助金を得て、袋井市教育委員会が行った昭和54年度袋井市長者平遺跡緊急発掘調査・長者平古墳群C支群測量調査概報である。本年度、萱間古墳（友永A古墳群第1号墳＝静岡県遺跡地名表—袋井市No.24—1）緊急発掘調査を併せ実施したが、墳丘と考えられてきた地表の盛り上がりは、自然地形であることが判明したため、萱間古墳の調査に関する報告は本概報に掲載しなかった。

2. 調査は古岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）を発掘担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。

3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

　第1章第1～3節　第2章第1～5節（第4節 ii）石器を除く）

　第3章　第4章……吉岡伸夫

　第2章第4節 ii）石器……松井一明　高野由美子

　付載　故早川二二氏が採集した長者平遺跡縄文土器について……早川保子

4. 第1表「昭和54年度出土石器計測表・石材一覧表」のうち、石材の同定は伊藤通玄氏（静岡大学教養部）による。法量等の計測は高野由美子が行った。

5. 本概報の編集は吉岡が行った。

6. 昭和54年度の発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

7. 調査および本概報の発刊にかかわる事務は、袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行った。

目　　次

第1章　序　　説……1
　第1節　調査にいたる経過……1
　第2節　地理的・歴史的環境……1
　第3節　発掘調査の経過・方法・調査整理体制……3

第2章　長者平遺跡……9
　第1節　基本層位……9
　第2節　縄文時代の遺構……9
　第3節　古墳時代以降の遺構……12
　第4節　縄文時代の遺物……16
　第5節　古墳時代以降の遺物……25

第3章　長者平古墳群C支群……27

第4章　まとめにかえて……33

付　載　故早川二二氏が採集した長者平遺跡縄文土器について……35

挿　図　目　次

第1図　長者平遺跡・長者平古墳群位置図……巻頭
第2図　長者平遺跡周辺地形図および発掘調査地点……6
第3図　昭和54年度長者平遺跡発掘調査区全体図……7
第4図　昭和54年度竪穴状遺構実測図……10
第5図　昭和54年度屋外炉跡実測図……10
第6図　昭和54年度土壙状遺構実測図……11
第7図　昭和54年度第1・2号墳周辺地形図……13
第8図　昭和54年度第1号墳主体部・周溝実測図……14
第9図　昭和54年度第2号墳前溝部および周溝状遺構実測図……15
第10図　昭和54年度出土土器拓影（1）……16
第11図　昭和54年度出土土器拓影（2）……17
第12図　昭和54年度出土土器拓影（3）……18

第13図　昭和54年度出土土器拓影（4）……19
第14図　昭和54年度出土底部・脚部実測図……20
第15図　昭和54年度出土石器実測図（1）……22
第16図　昭和54年度出土石器実測図（2）……23
第17図　昭和54年度出土山茶椀・小皿実測図……26
第18図　昭和54年度第1・2号墳・周溝状遺構・長者平古墳群C支群出土土器実測図……27
第19図　長者平古墳群C支群周辺地形図……28
第20図　長者平古墳群C支群第1号墳実測図……29
第21図　長者平古墳群C支群第2号墳実測図……30
第22図　長者平古墳群C支群第3号墳実測図……31
第23図　長者平古墳群C支群第4号墳実測図……32
付載第1図　故早川二二氏採集縄文土器拓影（1）……38
付載第2図　故早川二二氏採集縄文土器拓影（2）……39
付載第3図　故早川二二氏採集縄文土器拓影（3）……40

表　目　次

第1表　昭和54年度出土石器計測表・石材一覧表……24

図　版　目　次

図版1　昭和54年度東区（D・E・F・G1・2区）第Ⅲa層上面遺構検出状況　昭和54年度東区（D・E・F・G1・2区）完掘状況
図版2　昭和54年度東区（A・B・C・D1・2区）第Ⅲb層上面遺構検出状況　昭和54年度東区（A・B・C・D1・2区）完掘状況
図版3　昭和54年度竪穴状遺構（E・F1区）近景　昭和54年度屋外炉跡近景　縄文土器出土状況
図版4　昭和54年度土壙状遺構近景（第4～8・10～13号土壙）
図版5　昭和54年度土壙状遺構近景（第14・15・19・無番号土壙）　昭和54年度第1号墳検出状況　昭和54年度第1号墳主体部近景
図版6　昭和54年度第2号墳検出状況　昭和54年度第2号墳前溝部近景　昭和54年度周溝状遺構近景
図版7　長者平古墳群C支群遠景　長者平古墳群C支群第1号墳遠景
図版8　長者平古墳群C支群第1号墳主体部近景　長者平古墳群C支群第2号墳主体部近景

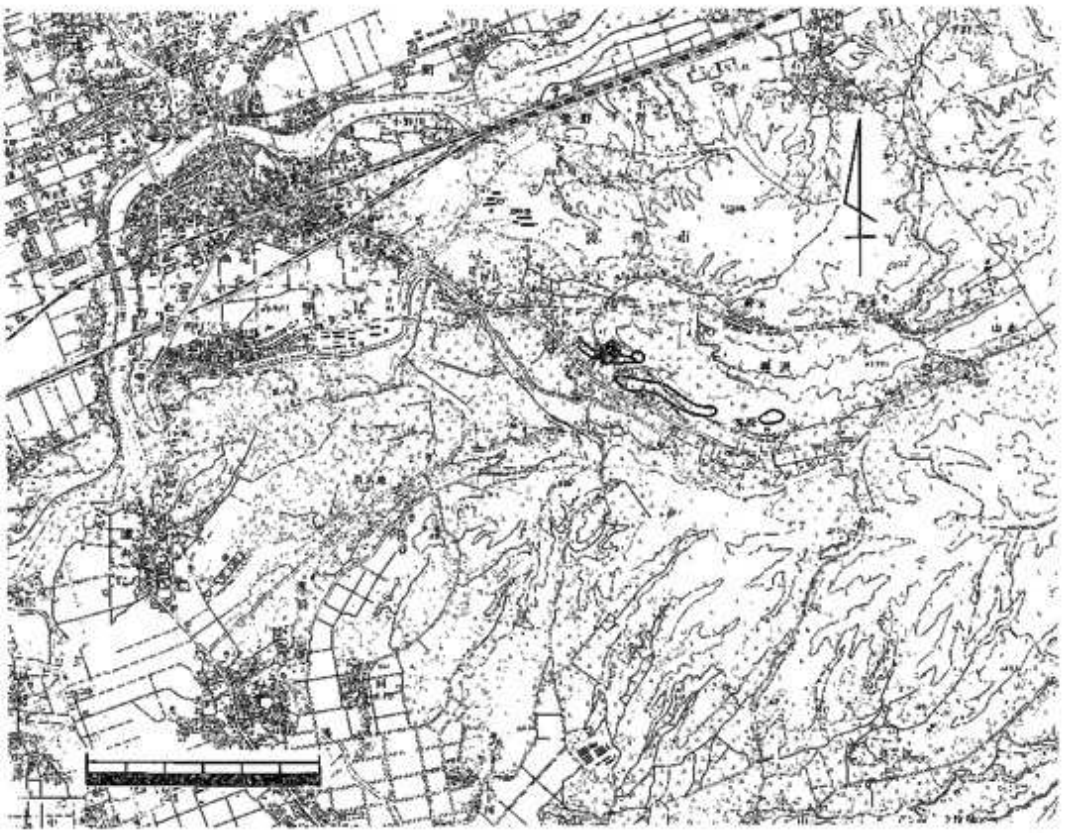
長者平古墳群C支群第2号墳西側周溝完掘状況　長者平古墳群C支群第3・4号墳遠景

図版9　長者平古墳群C支群第3号墳主体部近景　長者平古墳群C支群第3号墳前溝部・周溝完掘状況　長者平古墳群C支群第4号墳主体部近景　長者平古墳群C支群第4号墳集石近景　長者平古墳群C支群第4号墳東側周溝完掘状況

図版10　昭和54年度出土第Ⅰ群－b・c・d類土器　昭和54年度出土第Ⅰ群－d・e・g・h・i類土器

図版11　昭和54年度出土第Ⅱ群－a類土器　昭和54年度出土墨書土器

図版12　昭和54年度出土石鏃・石錐・スクレイパー　昭和54年度出土石斧・石錘



第1図　長者平遺跡・長者平古墳群位置図

第1章　序　　説

第1節　調査にいたる経過

長者平遺跡は袋井市豊沢字北方に所在する。そこは国鉄袋井駅から南東へ約2.5km 離れた小笠山西南山麓の丘陵地である。

地元の人々により採集された土器*・石器類は古くから地域の研究者により注目されてきたが、同じく小笠山西南山麓に立地し、東海地方最東端の縄文貝塚として知られる大畑遺跡**の影にかくれて、長者平遺跡の評価は、ともすれば軽んじられる傾向にあった。事実、各種の「考古学」に関する講座本のなかで、長者平遺跡の記述は皆無に近い。

昨年度、長者平遺跡において初めて発掘調査が行われ、2棟の竪穴住居跡、10基前後でサークルを構成する土壙群等が発見されたことは、当遺跡が縄文時代中期後葉を中心とする比較的大規模な集落址である可能性を高めた（吉岡他1979）。また長者平古墳群、中世の地域史資料をも充実させることができたのである。

袋井市豊沢地区は市内有数の茶産地であり、近年、優良品種への転換が、著しいスピードで進んでいる。苗の植え変えには、通常天地返しが伴うため、遺跡内における茶園改植事業では埋蔵文化財の取り扱いが、常に複雑な問題となっている。こうした状況下、袋井市教育委員会では、国・県の補助金を得て、緊急を要する茶園改植予定地の発掘調査を実施し、昨年に引き続き長者平遺跡の記録保存に努めることとなった。

第2節　地理的・歴史的環境

i）地理的環境

袋井市内を南北に貫く太田川の西岸には、磐田原台地（洪積台地）が広がり、東岸に丘陵地（掛川・曽我層群—鮮新世・更新世初期　小笠山礫層—更新世前期）が続く（鮫島1978）。

小笠山（標高264m）の西山麓は小笠沢川により南北に分断され、2条の尾根筋が長く緩やかにのびている。小笠沢川の両岸には、中下流域にかけて河岸段丘が形成され、長者平遺跡は、中流域北岸の小規模な段丘上に位置する。段丘は東西に細長く、低地との比高差7～10m を測る。中小河川が遺跡の南北を西流し、北—西—南にかけて低地・丘陵地が広がる。東側には、

---

*）採集土器片に関する早川保子氏の報告を本報に併載した。

**）昭和26年、故後藤守一博士を中心として、明治大学考古学研究室・地元の高校生等により発掘調査が行われた。平地住居や多量の獣骨を含む後期の貝塚が検出され、遠江地方の縄文研究に欠くことのできない資料を提供した（岡本1955）。昭和53年度からは、静岡大学考古学研究室（市原壽文教授）・袋井市教育委員会が継続的な発掘調査を進めており、大畑遺跡を理解するうえで新たな問題提起がなされつつある（市原1979）。

小笠山へ連なる支陵の末端が迫っている。

ii）歴史的環境

小笠山西南山麓に分布する縄文時代の遺跡群については、昭和53年度緊急発掘調査概報（吉岡他1979）で若干触れたので、ご参照願いたい。

第３章で報告する長者平古墳群Ｃ支群の歴史的位置を明確にするためにも、今回は太田川・原野谷川流域の古墳群について（特に長者平古墳群が属する小笠沢川流域古墳群について）整理してみる。

前・中期

太田川を望む磐田原台地の南東縁に松林山古墳（前期　前方後円墳）を中心として５基の前・中期古墳（経塚・新貝17・19・稲荷山・高根山古墳）が群集する。また原野谷川西岸の台地上には東西0.7km　南北2.3km の範囲内に全長50m 前後を測る４基の前方後円墳（甕塚・行人塚・各和金塚・吉岡大塚古墳一帆立貝型古墳…）と、円墳１基（春林院古墳）が分布する。他に岡津奥の原・下山古墳（共に掛川市）等が中期に比定されているが、いわゆる前・中期大型古墳は、上記２地域に集中している。今のところ袋井市域内で、明らかに中期に遡る古墳は発見されていない*。

後　　期

河道を西に転じた原野谷川中流域の両岸に突き出た舌状丘陵の先端や、中小河川の流域に、全長30～40m の小前方後円墳（宇佐八幡境内・石原沢・権現山・浅間山・五軒平・東別所・東山・愛野向山・高尾向山古墳等）が分布し、当地方の特色をなす。これら小前方後円墳のなかには10基未満の小規模な円墳群を伴うもの（愛野向山Ａ・Ｂ古墳群等）があり、後期群集墳の初源的な一形態を示していると思われる**。単独的に築造された円墳には大門大塚***一横穴式石室一・石ノ形古墳等がある。

後期古墳は中小河川を単位としてまとまりをもっているが、それぞれ主体となる墓制には、

---

*）磐田原台地の北東縁に位置する川会坊主山古墳を中期とする意見があるが、円筒埴輪の編年的位置等、検討すべき課題も多い。

**）袋井市域における初源的な後期群集墳の発掘調査例は３例ある。小笠沢川流域の地蔵ケ谷・金山古墳群は、後に横穴群が形成される同一支陵の頂部に分布し、５基前後の直葬墓により構成されていた。地蔵ケ谷古墳群には、小前方後円墳が１基含まれていた。６世紀初頭ごろ成立したと考えられている（川井1976）。

同じく小笠沢川下流域の南岸丘陵上に立地する雲座古墳群Ｄ単位群は、径10.7～15.3m の小円墳４基からなり、礫床ないしは単なる土壙を内部主体としていた。その形成時期は５世紀末葉から６世紀中葉にあるという（川井1972）。

***）横穴式石室内より変形神獣鏡・銀環・銀製空玉等の装身具、ｆ字杏葉等の馬具・武具類、器台・有蓋脚付坩をはじめとする土器類等多くの副葬品が出土したが、須恵器坏蓋・坏身の型式は、遠考研編年（山村他1966）第Ⅱ期から第Ⅲ期中葉にあたり、構築時期は６世紀前葉を降らないものと考えられている（川江1979）。

横穴と高塚墳との相違が見られる。*

小笠沢川流域古墳群

2基の単独墳（大門大塚・高尾向山6号墳）と10数箇所の後期群集墳・横穴群からなり、その分布は5地域に大別される。

1. 大門大塚古墳と大門山・渋垂神社上古墳群、地蔵ケ谷・金山古墳群からなる下流域北岸のグループ
2. 高尾向山6号墳と谷坂・響ケ谷・高尾向山古墳群からなる下流域南岸のグループ
3. 雲座古墳群（中流域南岸のグループ）
4. 長者平古墳群（中流域北岸のグループ）
5. 菩提山・山本山古墳群からなる開析谷最奥のグループ

下流域および中流域南岸グループの形成開始時期は、大門大塚・高尾向山6号墳や前述した地蔵ケ谷・金山・雲座古墳群D単位群で見るかぎり、6世紀前後ごろと考えられる。開析谷最奥の山本山古墳群は6世紀後半～7世紀前半にかけて成立したと推定されている(平野他1978)。小笠沢川流域では、まず6世紀前後ごろ、下流域に単独墳、小規模な群集墳が成立し、時期が降るにしたがって、古墳群は順次中・上流域へ拡大していった。その主たる形成期は6世紀後半以降であったと考えられる。また中流域で盛んに高塚墳（長者平・雲座古墳群）が築造されていく時期、下流域では横穴群（地蔵ケ谷横穴群）が形成され、最奥部でも横穴（山本山横穴群）が高塚墳に代わり主要な墓制となりつつあった。**長者平古墳群と地蔵ケ谷横穴群は、同一水系に時期を同じくして成立した大規模群集墳・横穴群である。

第3節　発掘調査の経過・方法・調査整理体制

i) 発掘調査経過

昭和54年7月25日～31日　萱間古墳の墳丘測量。墳頂部で交わる十字トレンチ（幅1.5m）を設定し発掘調査したが、地表下10cm 程で地山の礫層に達し、主体部等の施設・遺物はまったく検出されない。古くから墳墓と言い伝えられてきた円墳状の高まりは、自然地形であると判断した。

---

*）森町飯田付近から袋井市、浅羽町にかけて分布する古墳群は、中小河川を単位として8つに区分することが可能である。分布域と主体となる古墳群を示めせば、1. 一ノ宮川流域古墳群（山下・片瀬ハンサ山横穴群） 2. 太田川中流域古墳群（谷口・観音堂横穴群） 3. 宇刈川上流域古墳群（宇刈横穴群） 4 宇刈川中流域古墳群（ズン坂・八幡山横穴群） 5. 原野谷川流域古墳群（愛野向山A・B古墳群） 6. 小笠沢川流域古墳群（長者平古墳群・地蔵ケ谷横穴群） 7. 弁財天川上流域古墳群（貫名地A・B古墳群） 8. 弁財天川下流域古墳群（愛宕山横穴群）。

**）山本山古墳群を構成する高塚墳・横穴の総数は明確でないが、群集墳と横穴群が近接して、同一支陵に形成されていた。発掘調査の所見は、「(遠考研須恵器編年) 第Ⅲ期中葉から古墳群が形成され、第Ⅲ期後半ないし第Ⅳ期前半まで続き、第Ⅳ期前半からは横穴群が営まれていった。」と結論づけられている（平野他1978)。

8月16日～22日　長者平遺跡の発掘予定地（東区）に発掘基本杭（10m 間隔）、調査用ベンチマークを設定。

8月23日～31日　現地作業を開始する。D・E・F・G1・2区の第Ⅰ層（耕作土）を除去し、第Ⅱ層が落ち込む中世掘立柱柱穴群を検出。第Ⅲ層上面の全体写真を撮影した。

9月1日～14日　南区に調査用トレンチ・ベンチマークを設定し、排土作業（第Ⅰ層）に取りかかる。東区では、中世掘立柱柱穴群を実測した後、第Ⅲb層上面まで掘り下げた。縄文時代の遺構は顕著でないが、数箇所土壙状の落ち込み（第17・18・19号土壙）を検出した。

9月17日～30日　D・E・F・G1・2区を完掘。竪穴状遺構・屋外炉跡を検出。写真撮影・遺構実測作業を完了し、埋め戻す。南区のⅡ層を除去した時点で、昭和54年度第1号墳主体部・同第2号墳前溝部を検出した。

9月1日～20日　A・B・C・D1・2区に発掘基本杭（10m 間隔）を設定し、排土作業を開始したが、雨の日が多く、作業は思うように進展しない。昭和54年度第1・2号墳の発掘を継続。

9月22日～31日　東区に的を絞り、A・B・C・D1・2区の調査を一気に遺跡基盤層上面での遺構確認作業まで完了させた。A・B1・2区では茶園耕作が深くまで達し、第Ⅱ・Ⅲ層は認められない。D1・2区以南に比べ土壙状の落ち込み（第1～16号土壙）が密に検出されたが、遺物の出土量は少ない。昭和54年度第1・2号墳を完掘。写真撮影。

10月1日～6日　南区で奈良朝の遺物を伴う周溝状遺構を検出。A・B・C・D1・2区の遺構の発掘作業を継続した。

10月9日～20日　再び雨の日が続き、発掘作業は停滞した。

10月22日～31日　A・B・C・D1・2区の遺構を完掘し、写真撮影の後、遺構実測作業に取りかかる。

11月5日～15日　A・B・C・D1・2区の完掘写真を撮影。南区の周溝状遺構の調査終了。東・南区を埋め戻す。発掘資材等を長者平古墳群C支群へ移動させ、長者平遺跡の現地調査は完了した。

11月19日～30日　長者平古墳群C支群の測量調査を開始した。C支群の立地する段丘面に、測量・調査用の基本杭を設定し、地形測量を行う。墳丘を残す4基の小円墳群周辺に東西・南北方に走る試掘トレンチ（幅1.5m）を定め、遺構の残存状態を確かめたが、新たに遺構は検出されなかった。21日～24日まで辰己和弘先生（県教委文化課指導主事）の現地指導を得た。

12月5日～15日　墳丘を残す4基の円墳に、墳頂で交差する十字トレンチを設定し、各古墳の平面形（規模）・外部施設・主体部構造を確認した。写真撮影・実測図作成の後、トレンチを埋め戻す。現状保存すべき範囲をロープで指示し、昭和54年度現地作業のすべてを終了した。

ii) 方　　法

長者平遺跡東区では調査予定域全面を1辺10m の方形グリッド（大グリッド）と、大グリッドを4分割した1辺5m の小グリッドに区画し、全面分層発掘した。大グリッドは北から南へA・B・C…区、西から東へ1・2区と名付け、南北・東西名の組み合わせで呼称した（例えばA1区　B2区等）。小グリットは、北西一南西一北東一南東の順で、a・b・c・d区とし、大グリット名に併記することとした（例えばA2－d区等）。小グリッドは遺物取り上げ、遺構実測等の基本単位である。

包含層（第Ⅲ層）内の遺物は、できうるかぎり出土地点・レベルを50分の1縮尺図に記入し、地点・レベルごとの変化を捉えることができるよう努めた。遺構出土の遺物は遺構単位で取り上げた。

遺構は発見されたものから、種別ごとに連番を付して呼び（例えば第1・2号土壙　第1号炉等）、50分の1縮尺図に記入したが、整理作業終了時に名称を変更した（概報記載の名称）。

南区では改植予定地の長辺に沿うトレンチ（幅1.5m）を設定し、遺構の残存状態を確認した後、必要な範囲を拡張し平面調査した。包含層（第Ⅱ・Ⅲ層）内の遺物の出土量は少なかったため、遺物は遺構単位（例えば昭和54年度第1号墳主体部　東側周溝内等）で取り上げた。

長者平古墳群C支群の調査目的は、支群の分布範囲の把握・測量にあったため、10m 間隔で設定した幅1.0m のトレンチにより、まず支群を構成する古墳基数を確認し、各古墳の規模・外部施設・主体部構造等の概要を知り得た時点で調査を終了した。地形・墳丘測量は1m 間隔の絶対標高をだし、50分の1縮尺で図化（原図）した。

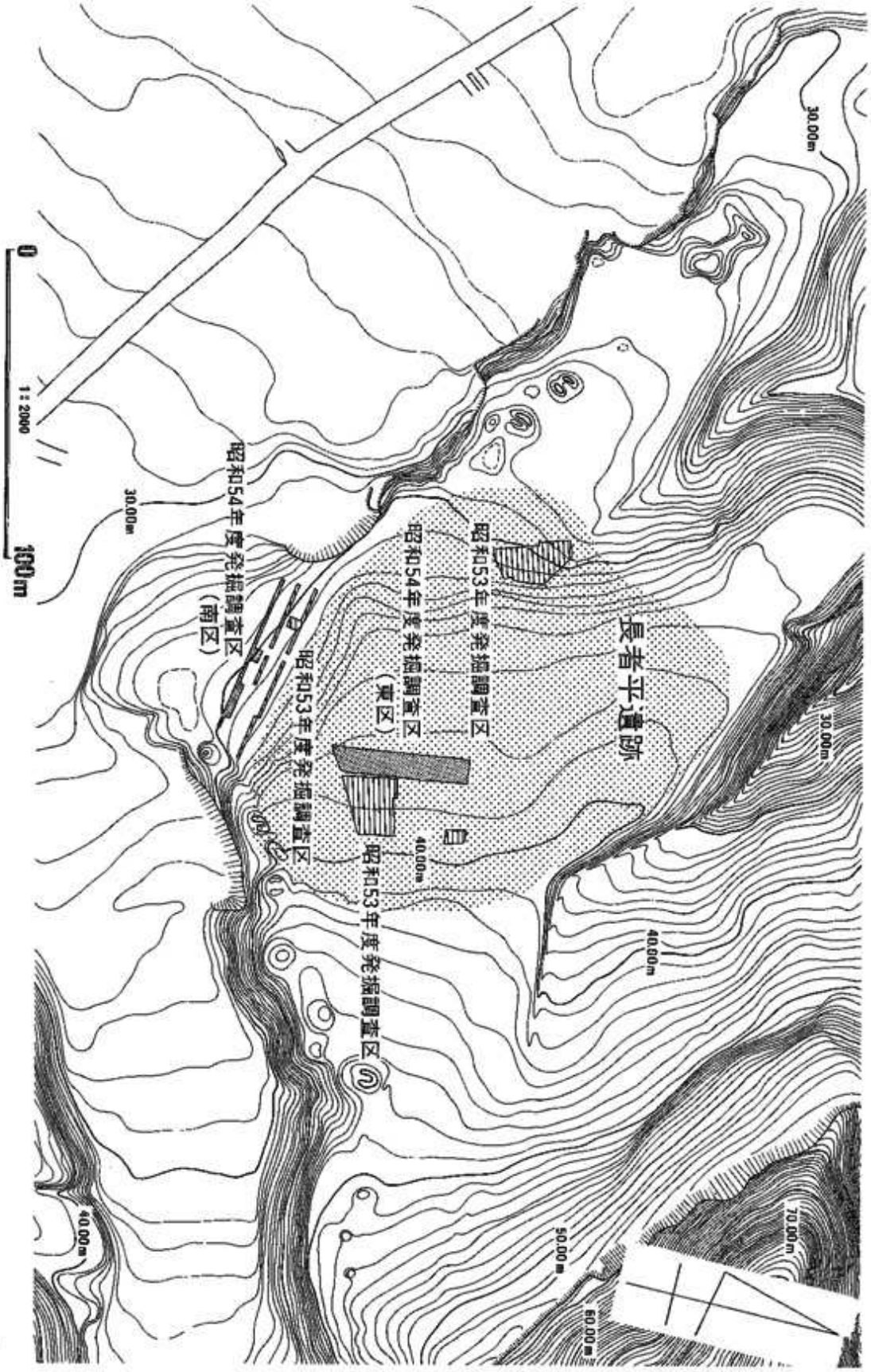
3地区とも、遺構実測は20分の1縮尺図を基本し、必要に応じ、随時10分の1縮尺図を作成した。写真撮影にはブローニーサイズ原画（白黒）、35mm サイズ原画（白黒　カラーリバーサル）を併用した。

iii) 調査整理体制

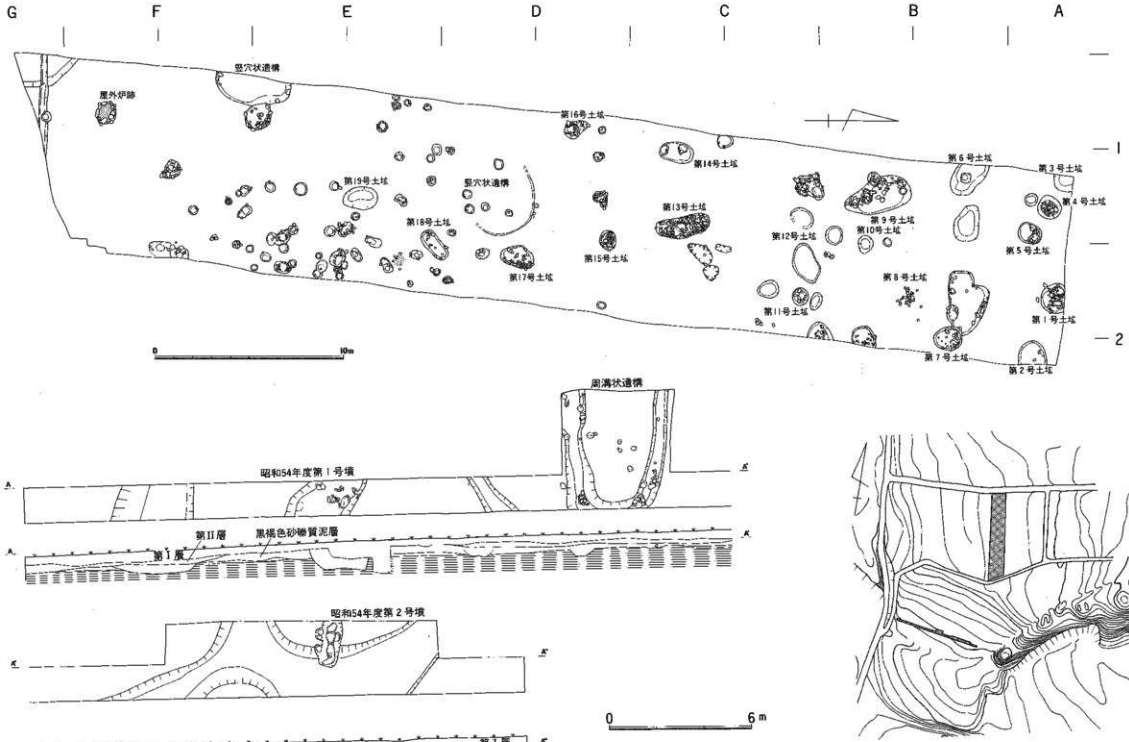
調査指導機関　静岡県教育委員会文化課（指導主事山下晃　辰己和弘）

調査実施機関　袋井市教育委員会　　教育長　　山崎恭一
　　社会教育課長　松本長平
　　社会教育係長　長沼宣男
　　文化財係　　吉岡伸夫

調査整理参加者　池野とも子　富田玉枝　田中美智子（以上袋井市萱間）　名倉やす子　浅井征江　鈴木みず江　早川保子　早川里美　金原新一　榑松光子　寺田秀子　仲根世始子　仲根わか　鈴木咲子　松田ひで子（以上袋井市愛沢）　渡部直志　石井徹　菊川英政（以上国学院大学学生）　西井幸雄（立正大学学生）　中村裕子　幸田尚子(浜松市)



第2図　長者平遺跡周辺地形図および発掘調査地点



第3図　昭和54年度長者平遺跡発掘調査区全体図

第2章　長者平遺跡

第1節　基本層位

昭和53年度同様、遺跡基盤層（第Ⅳ層＝小笠山礫層）上には、基本的に3層の堆積土壌が認められたが、第Ⅲ層を上下層に区分し、砂礫質の強い上層を第Ⅲa層、色調に黄色味が増し、遺跡基盤層にかけて漸移的な変化を示す下層を第Ⅲb層とした。南区では第Ⅱ・Ⅲ層が厚く、両層間にさらに1層、わずかに砂礫質を帯びた黒褐色泥層が確認でき、昭和54年度第1・2号墳の主体部・前溝・周溝内、周溝状遺構内には、主にこの黒褐色砂礫質泥層が落ち込んでいた。

長者平遺跡の基本層位を地表より順に整理すれば次の通りである。

第Ⅰ層（暗褐色土層）＝層厚20～25cm　耕作土。縄文時代中期より古墳時代、中・近世・現代までの遺物を混在的に含む。

第Ⅱ層（黒色泥質土層）＝層厚5～15cm　段丘斜面（南区）で厚く、縄文時代から古墳時代、中世の遺物を含む。東区の掘立柱柱穴群は第Ⅱ層を覆土とする。

黒褐色砂礫質泥層＝段丘斜面（南区）のみに認められ、層厚10～20cm と比較的厚い。昭和54年度の調査結果を見るかぎり、古墳・奈良時代の遺物を主に包含していたが、調査域全面に一様な堆積を示さず、崩壊した古墳の墳丘土を自然堆積層として誤認した可能性もある。南区における古墳・奈良時代の遺構覆土。

第Ⅲa層（暗褐色砂礫混り土層）＝層厚5～15cm　縄文時代の遺物包含層。

第Ⅲb層（黄褐色砂礫混り土層）＝層厚5cm 未満　第Ⅲa層から遺跡基盤層へかけての漸移的な色調をなすが、砂礫質は第Ⅲa層に比べ弱い。相対的に多くの縄文時代遺物を包含する。第Ⅲa層とともに縄文時代の主要な遺構覆土。

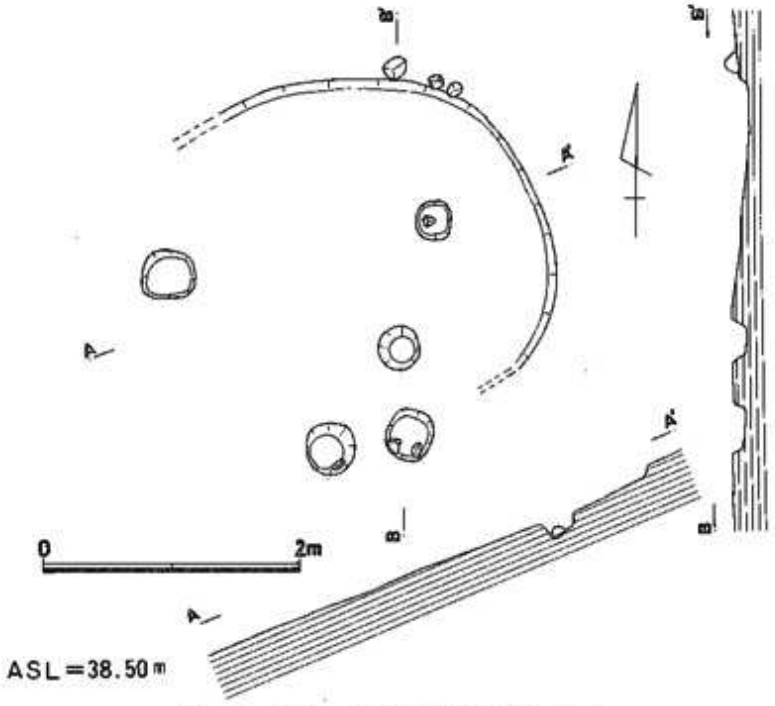
第Ⅳ層（黄褐色礫層）＝遺跡基盤層　小笠山礫層　無遺物。

第2節　縄文時代の遺構

昭和54年度の発掘調査において検出された縄文時代の遺構は、竪穴状遺構1箇所、屋外炉跡1箇所、土壙状遺構19箇所、柱穴状遺構10数箇所である。

i）竪穴状遺構

D1－d区で、北から東にかけて弧状の輪郭をなす竪穴状遺構を検出した。検出地点は段丘縁から北方へ約50m、昭和53年度第2号住居跡から西北方へ約10m 離れている。第Ⅳ層（遺跡基盤層）内に第Ⅲb層が落ち込み（深さ約8cm）、弧状部分は壁状を呈していた。西・南側は徐々に浅くなっていた。竪穴内と近接して5箇所の柱穴状遺構（径20～35cm）が確認されたが、その分布は不規則であり、深さ（15～35cm）も一定しない。約15cm 高い第Ⅲa層中に、こぶし大礫と縄文土器片が集中していたものの、焼土等は一切認められなかった。竪穴内からの出土遺物は皆無である。壁状の落ち込みが全周したとしても、推定径は3m 前後と住居跡として

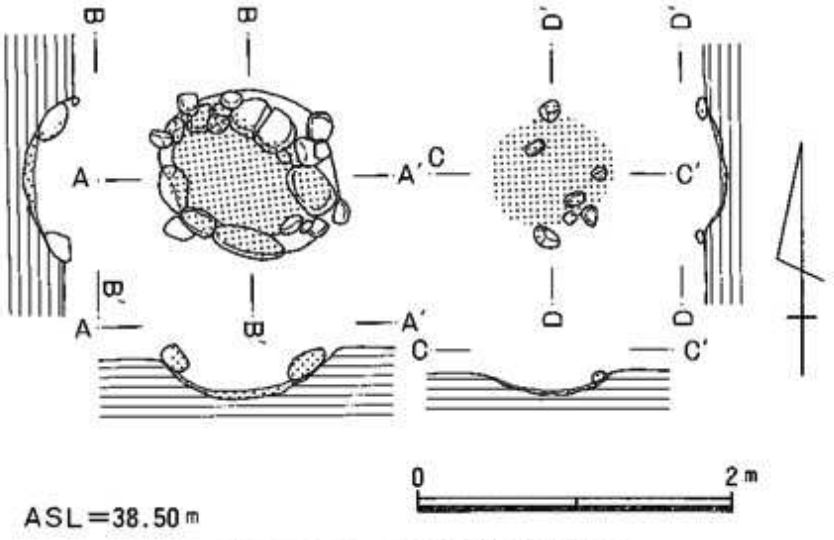


第4図　昭和54年度竪穴状遺構実測図

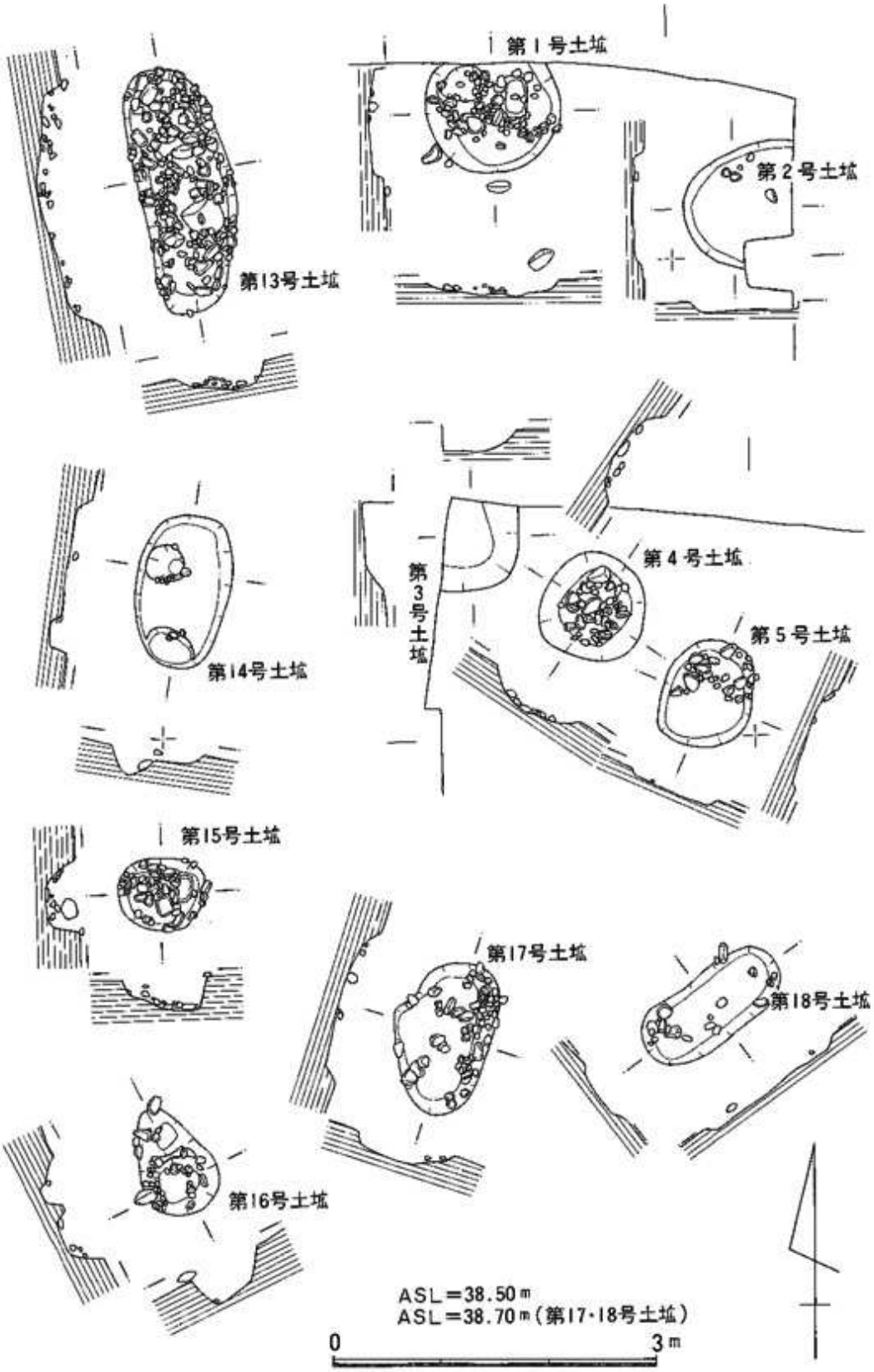
は小さく、当遺構の性格は明らかでない。他に1箇所同様の落ち込み（南北幅約4m　深さ5～10cm）がE1－b・F1－a区から検出されている。

ii）屋外跡炉

F1－b区において第Ⅲb層の除去途中に検出された。遺跡基盤層をすり鉢状に約30cm 掘り凹め、壁の部分に礫を配した石囲い炉である。すり鉢状の凹みは北西－南東方向に若干のびた平面楕円形（長径1.2m　短径1.05m）をなし、比較的大型の楕円礫（25～45×15～25×10～15cm）を北東側に2個、南西側に3個、小口を接するように並列配置していた。これら大型礫の間と、楕円形の凹み両端（北西・南東側）には、16個のこぶし大礫（約15×10×10cm）が不規則に積み上げられていた。



第5図　昭和54年度屋外炉跡実測図



第6図　昭和54年度土壙状遺構実測図

焼土は炉内全面に見られ、底面中央で厚さ約5cm を測る。炉石に顕著な焼痕が残り、炉の使用途中に割れたと思われる北東側大型礫の割面にさえ、明瞭な焼痕が認められたことから、当炉跡の使用期間は長期であったと考えられる。

炉跡周辺を精査したものの、壁状・柱穴状の落ち込みはまったく認められず、屋外炉と判断した。E2－a区の第Ⅲb層上面においても、散在する焼礫（こぶし大礫）と焼土（約80×70×3cm）を確認している。

iii）土壙状遺構

A・B・C1・2区に集中していた。土壙分布域にあたる発掘調査区北半の遺跡基盤層（第Ⅳ層＝小笠山礫層）は浅く、茶の根の攪乱が深くまで達していたため、人為的になされた掘り込みの識別は容易でなかった。遺跡基盤層の上面近くにいたり、初めて遺構確認作業を行ったが、顕著な配石を持たない浅い土壙状遺構と、茶の根の影響を受け、遺跡基盤層の一部が変色・変質した箇所の視覚的な識別は困難であった。こうした意味で、昭和54年度の発掘調査において検出された土壙状遺構を、すべて縄文時代の墓穴とするには、疑問点も多い。

形態・規模　長径98～360cm　短径83～185cm　深さ10～40cm を測る。第9号土壙のような大規模なものも認められたが、長・短径150cm 以下の土壙状遺構が多い。平面形は一般的に円形あるいは正円に近い楕円形をなし、長楕円形のものが2基（第9・18号土壙）ある。総じて浅く、断面皿状を呈するが、第6・11号土壙では底面中央に、さらに1段深い柱穴状の掘り込みが認められ、第10号土壙の壁は垂直に近い傾斜をもって掘られていた。

配石　第3・6・10・12・19号土壙を除き、配石を有していた。配石形態には、こぶし大・人頭大礫10個前後からなる小規模なもの（第8・11号土壙）と、同様な礫を多量に集積させたもの（第1・9・13号土壙等）がある。後者の配石は、遺構内に礫が落ち込んだような状態を示し、密疎の差、集積箇所に片寄りが見られた。礫の多くが底面に密着している点、昭和53年度の土壙状遺構と大きく異なっている。特に、第13号土壙内の集石は顕著で、一見礫だめを思わせる様相を呈していた。

分布・遺物　発掘調査区北半に集中し、2～3基が近接しつつ分布しているが、調査範囲が東西に狭く、昭和53年度の調査で認められたような、サークル状（10基前後）のまとまり（土壙群）は見られない。

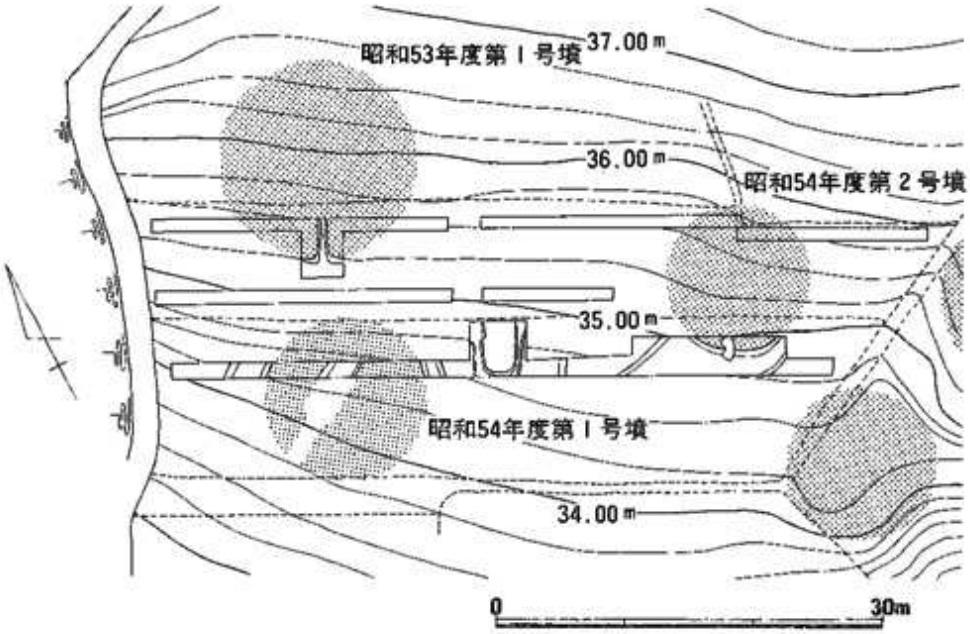
各土壙状遺構に伴った遺物は皆無である。

iv）柱穴状遺構

第Ⅲa・b層を覆土とする柱穴状遺構が10数箇所検出された。竪穴状遺構と重複・近接した5箇所を除くと、D1－c区に直線状に並ぶ3箇所の柱穴状遺構がある。他はきわめて散在的な分布を示している。

第3節　古墳時代以降の遺構

段丘南縁の張り出し部分にあたる南区において、2基の古墳（昭和54年度第1・2号墳）と周溝状遺構を検出した。また東区の南西端（G1－a区）で、古墳時代の須恵器小片（坏蓋か



第７図　昭和54年度第１・２号墳周辺地形図

？）を含む第Ⅱ層を覆土し、北西一南東方向に円弧をなしてのびる溝状遺構の一部が発見されており、段丘頂部近くに、さらに１基古墳の築造されていた可能性もある。東区南半（Ｄ・ＥＦ１・２区）に分布する掘立柱柱穴群は、覆土（第Ⅱ層）、伴出遺物から見て中世に属すると思われる。

ⅰ）昭和54年度第１号墳

南区西端で検出された。トレンチ調査であるため詳細は明らかでない。径12m 前後（周溝外縁径）の小円墳と推定され、昭和53年度第１号墳に南接している。

第Ⅱ・Ⅲ層間に堆積していた黒褐色砂礫質泥層が主体部周辺で盛り上がり、その質・色調が細く変化することから、当泥層は墳丘の一部が残存したものとも考えられる。

主体部（＝掘り方　確認幅約2.1m　深さ約0.6m）は上記の黒褐色砂礫質泥層を掘り込み、第Ⅲ層に達していた。主体部の大半がすでに破壊されていたが、掘り方の壁の立ちあがりと、西壁の裏ごめ土が明瞭に残り、主体部構造は、南西に向って開口するきわめて幅の狭い横穴式石室と思われる。根石は抜き取り痕から見て、横口積で配置されていたらしい。

西側の周溝（幅約3.3m）は、第Ⅲ層を約20cm掘り込み、墳丘側に角のある断面Ｕ状を呈する。

主体部内の攪乱土および西側周溝内より出土した土器を第18図に示した。断言できないが、当古墳の営まれた時期は６世紀後半と考えられる。

ⅱ）昭和54年度第２号墳

昭和54年第１号墳から東へ約30m 離れ、段丘縁の小円墳に隣接する。開口部側の周溝と前溝の一部を調査したが、主体部は改植予定地外に位置し、未調査である。確認された墳丘裾から推定して、周溝内縁径約9.0m の小円墳と思われる。

周溝は幅2.0～2.9m を測り、第Ⅲ層を15～20cm 掘り込んでいた。断面U状を呈する。

南北にのびる前溝（確認長約2.0m　幅約0.75m　深さ約0.3m）は２段掘りされ、周溝との接続部で急に浅くなり途切れていた。底面はでこぼこしており、西壁の上端が２箇所、外方に張り出していた。

周溝から西方に、溝状遺構（幅1.4～1.7m　深さ0.2m 前後）が続いている。

前溝近くの周溝底面に密着していた須恵器坏蓋と、周溝内より出土した土器を第18図に示した。出土土器は６世紀後半～７世紀初頭に位置づけられる。

iii）周溝状遺構

昭和54年度第１号墳に東接して、U状に曲がる溝状遺構を検出した。北端の状況は明らかでないが、南端と同様に東西の溝状遺構が連結しているとすれば、周溝状をなし、その平面形は四隅の若干張り出た楕円形様（東西幅1.6～3.0m）を呈すると思われる。

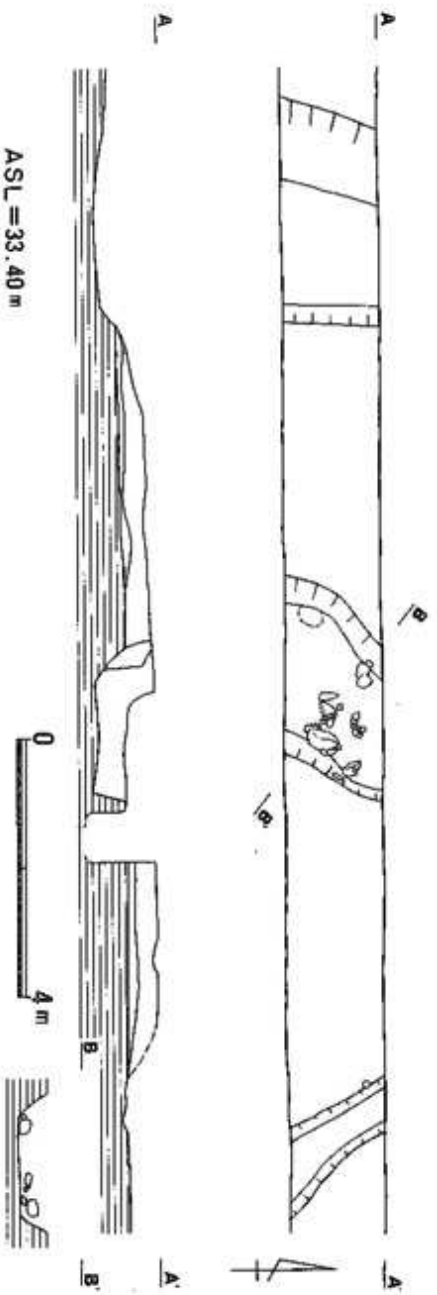
溝状遺構は幅0.6～1.4m　深さ0.1～0.35m を測り、南に向ってわずかに傾いている。北西端で幅を増し、東側に比べ、西側の溝は第Ⅲ層を深くまで（約30cm）掘り込んでいた。底面は平坦で、断面U状をなす。北西端の拡幅部と南側張り出し部近くの溝状遺構内に多くのこぶし大礫が集積していた。周溝状に取り囲まれた平坦部を精査したものの、主体部（土壙）を思わせる落ち込み等は一切認められず、盛土の痕跡も明瞭でなかった。

本遺構の性格は明らかでないが、溝内の集礫間に混在していた須恵器片（第18図）は奈良時代初頭に比定されるものである。

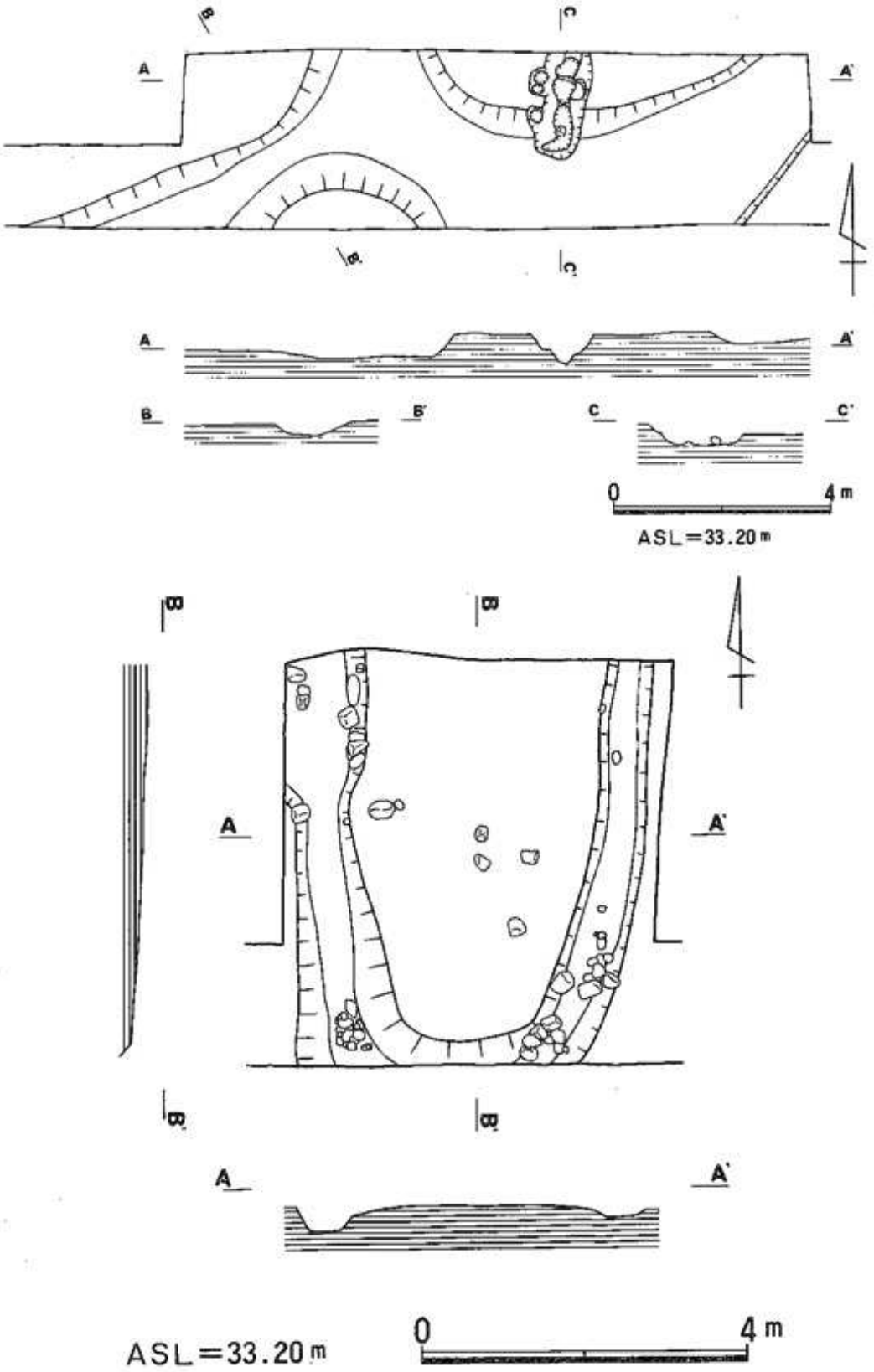
iv）掘立柱柱穴群

Ｄ１・２区～Ｆ１・２区にかけて分布する40数箇所の柱穴状遺構を検出した。すべて第Ⅱ層を覆土とし、柱穴群付近の第Ⅱ層内に、多くの山茶碗・小皿片が見られることから、中世の遺構と判断した。

総じて径30～40cm と小規模であり、遺跡基盤層をわずかに掘り込んでいる（深さ15～20cm）。建物等の検討は十分行っていない。柱穴群付近の第Ⅱ層中より出土した土器を第17図に示した。



第８図　昭和54年度第１号墳
主体部・同溝実測図



第9図　昭和54年度第2号墳前溝部および周溝状遺構実測図

第4節　縄文時代の遺物

昭和54年度の発掘調査において出土した縄文時代の遺物は土器・石器である。昭和53年度に比べ、出土量はきわめて少ない。遺物の多くが第Ⅲ層中に混在し、遺構に伴ったものは皆無である。

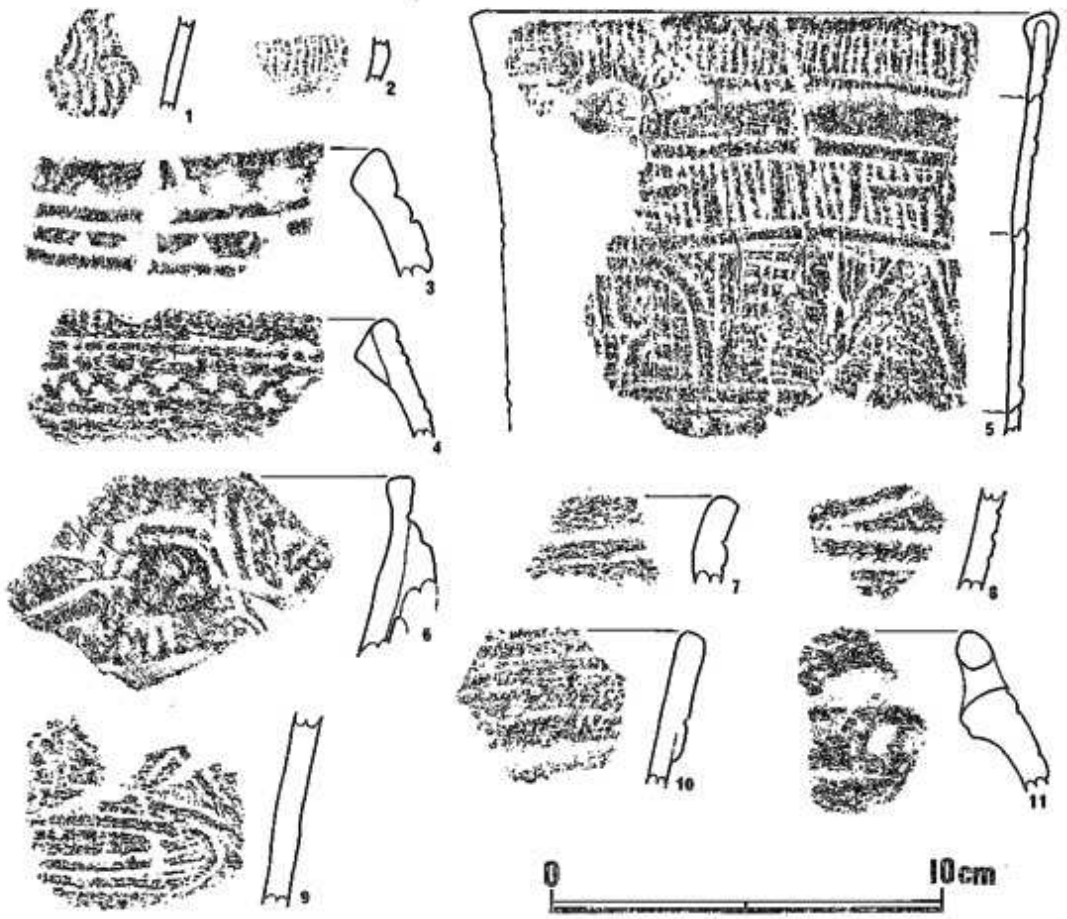
i) 土　　器

出土総量は39×54×15cm のポリコンテナーに約2箱分である。発掘調査区が昭和53年度の調査区に隣接していたにもかかわらず、昭和54年度の出土土器中には、前年度まったく認められなかった中期初頭および後期初頭の土器群が含まれていた。

出土土器は次の2群11類に分類できる。

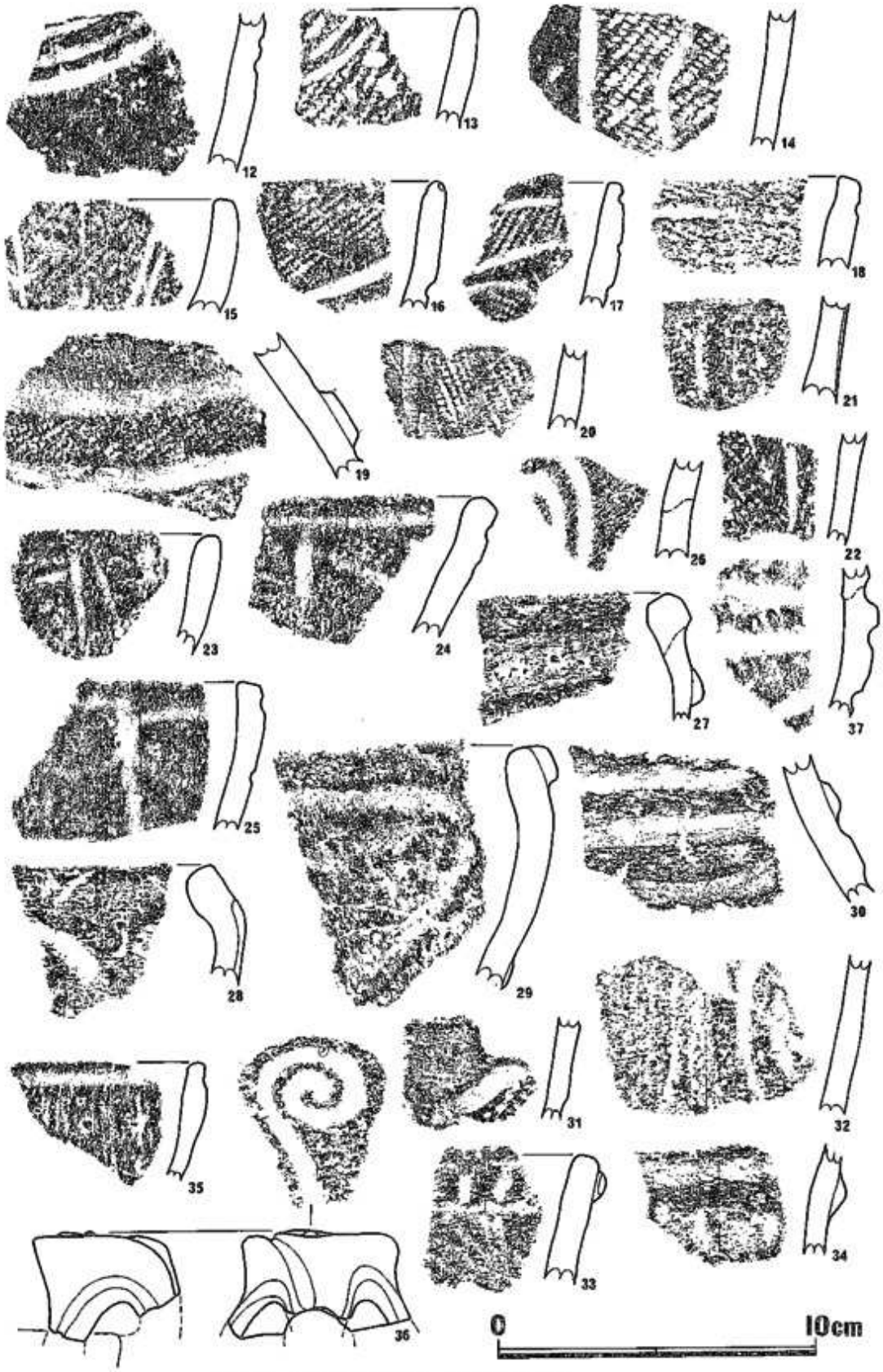
第Ⅰ群土器

中期に属する土器を第Ⅰ群とした。



第10図　昭和54年度出土土器拓影（1）

1・2＝第Ⅰ群—a類　3～11＝第Ⅰ群—b類



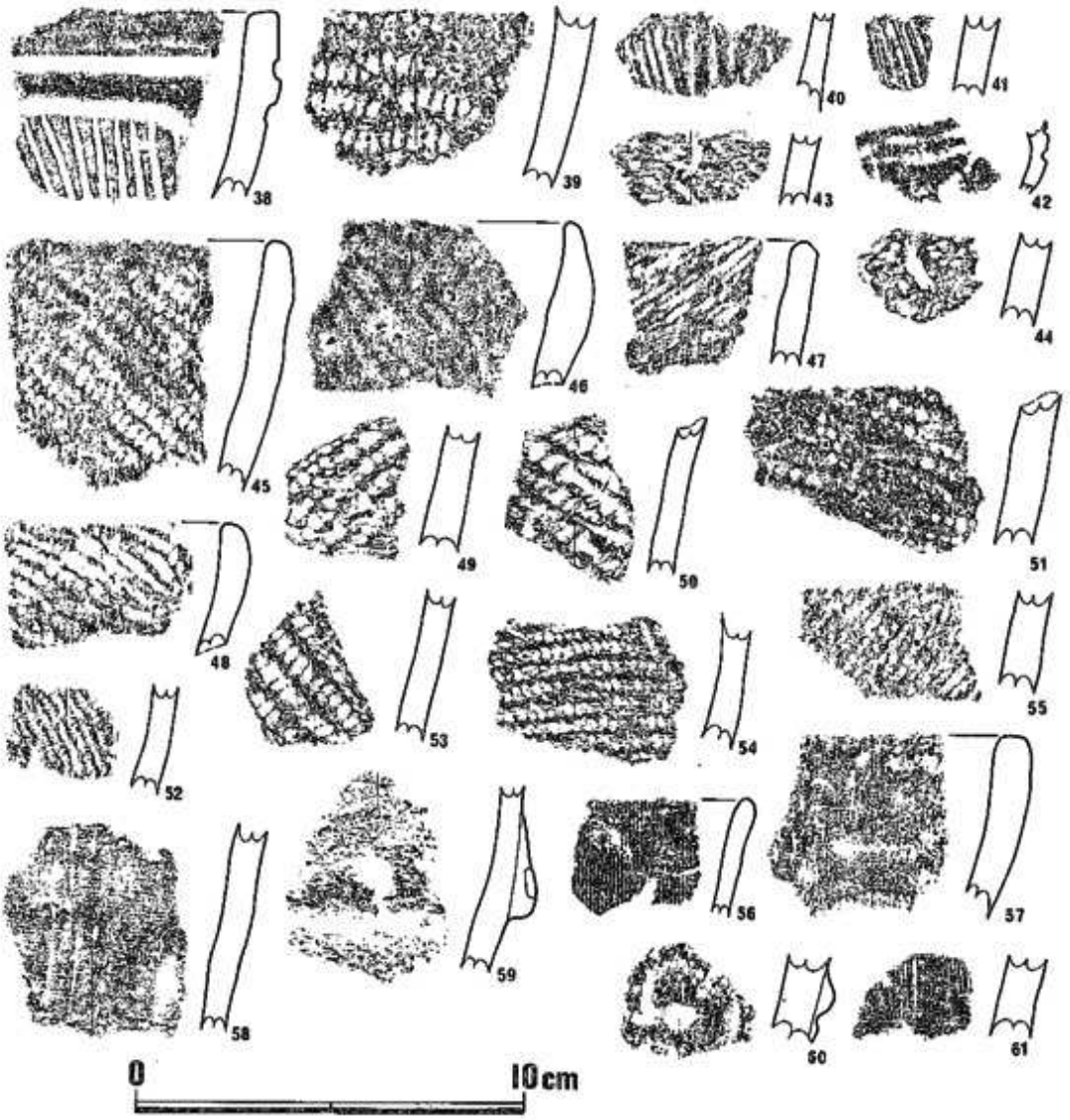
第11図　昭和54年度出土土器拓影（2）

12＝第Ⅰ群－c類　13～36＝第Ⅰ群－d類

a類（第10図－1・2）　鷹島式土器（巽1969）に酷似し、連続爪形文を密に施す土器である。連続爪形文は逆C字型をなし、第10図－1では2条認められる。第10図－2はあわい隆帯上に施される。

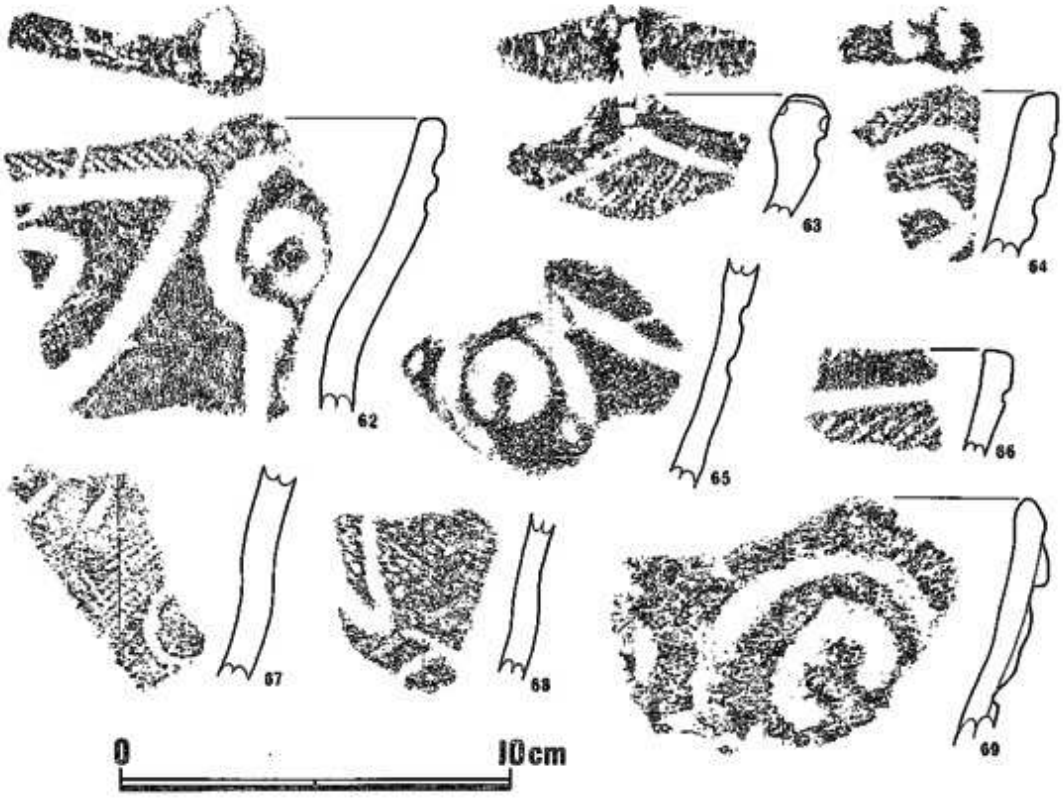
b類（第10図－3～11）　五領ケ台式土器直前ないしは五領ケ台Ⅰ式土器（今村1972）に対比される土器をb類とした。半截竹管により平行沈線文を施す比較的薄手の土器である。長石粒を多く含み、暗褐色を呈する。

第10図－5は口縁部に横位の平行沈線により2段の文様帯を構成し、文様帯内を集合沈線（縦位）で埋めている。胴部に山形・楕円形の区画を描き、格子文・平行沈線文を加える。口縁端部は肥厚し、器形は筒型に近い。第10図－9では楕円形区画内に横位沈線が、第10図－3には三角刻文が施される。波状口縁をなす第10図－6は橋状把手部の破片である。



第12図　昭和54年度出土土器拓影（3）

38～41＝第Ⅰ群－e類　42＝第Ⅰ群－f類　43・44＝第Ⅰ群－g類
45～55＝第Ⅰ群－h類　56・57＝第Ⅰ群－i類　58～61＝不明土器



第13図　昭和54年度出土土器拓影（４）

62～69＝第Ⅱ群－ａ類

口縁部形態には若干内彎し、口端内面を肥厚させたもの（第10図－３・４・11）と、外上方へ直っすぐのびるもの（第10図－５・７・10）がある。器形は深鉢型をなす。

第10図－４の鋸歯状文は五領ヶ台Ⅱ式土器（今村1972）に特徴的な施文要素であるが、第10－５では集合沈線が施文の主体を占めており、器形が筒型を呈するなど前期末葉の姿を残している。

ｃ類（第11図－12）　三河地方の咲畑式土器（久永1960　紅村1978）に類似し、昭和53年度ａ類とした土器である。３条の太い沈線により、波状文（連弧文）を構成する。胎土は多量の石英・長石粒を含み、きわめて特徴的である。

ｄ類（第11図－13～36）　昭和53年度ｂ類とした土器にあたるが、胴部文様帯が迫り上がり、口縁部文様帯の退化・縮少化傾向は著るしい。渦文は見られず、胴部懸垂文も単純に垂下する。加曽利ＥⅣ式土器に対比される。

第11図－15は半截竹管により施文され、第11図－33は隆帯上に刻みを有する。

口縁部形態には若干内彎するもの（第11図－15・25・27～29）と、外上方へ直線的にのびるもの（11図－16～18・23・33）がある。器形は深鉢型を呈する。

ｅ類（第12図－38～41）　曽利式土器（長崎他1979）に対比され、昭和53年度Ｃ類とした土器群にあたる。沈線により口縁部文様帯を区画し、地文としてヘラ描沈線・条線を施す土器で

ある。第12図—39は櫛状施文具により刺突し、ハノ字状文を構成する。

f類（12図－42）　里木Ⅲ式土器（間壁他1971）に類似し、昭和53年度d類とした土器である。半截竹管状施文具により波状文を施し、縦位の細条線を地文とする。昭和54年度の調査では、わずか1片しか出土しなかった。

g類（第12図－43・44）　結節縄文を有し、昭和53年度e類とした土器である。飯田地方を中心として天竜川流域に分布し（神村1978）、かつて広野C式土器（向坂1970　加藤1972）と呼ばれた在地性の強い土器である。

h類（第12図—45～55）　縄文のみ施された土器片を一括しh類とした。口縁部形態はd類土器に類似する。

i類（第12図－56・57）　無文の口縁部破片をi類とした。

第Ⅱ群土器

後期に属する土器を第Ⅱ群とした。

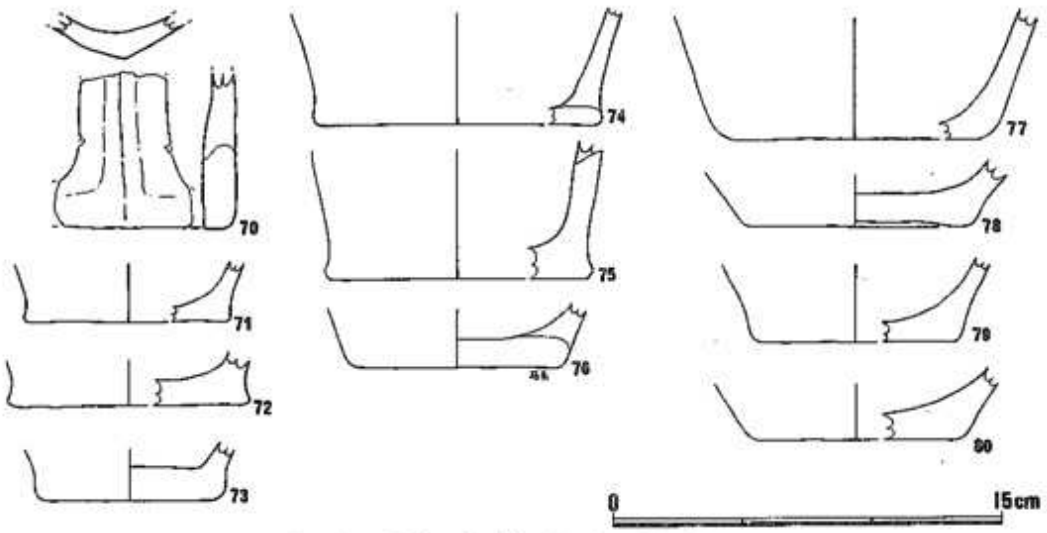
a類（第13図—62～69）　太く明瞭な沈線により文様を区画し、比較的細かい磨消縄文を施す土器である。胎土に赤色粒を含み、砂質が強い。茶褐色を呈する。

円周の一部が途切れた同心円（第13図—62・65・69）や鍵状文(第13図—62・68）が見られ、第13図—62～64の波状口縁頂部には、棒状施文具により刺突・刻みが加えられる。

器形は頸部のくびれが弱い深鉢型を呈し、口縁部は若干内彎する。口縁端部を肥厚させたもの（第13図—63）がある。

在地化しているが、南関東地方称名寺式土器の古段階（今村1977）に比定しうる土器群であろう。

不明土器（第12図—58～61）　第12図—59は幅広い貼付隆帯上に刺突列を有し、第12図—60では隆帯が小さな渦文を構成する。第12図—61はf類の胴部破片とも考えられるが、胎土を異にし、著しく厚い。



第14図　昭和54年度山土底部・脚部実測図

底部・脚部（第14図－70～80）　張り出し底様を呈するもの（第14図－72・74・75）と底部縁に丸味をもって胴部に移行するもの（第14図－76～80）がある。第14図－78は上げ底様をなす。底面に網代痕・木葉痕等は認められない。多くはｄ類土器の底部と思われる。第14図－70は楕円形の窓を持つ脚部片である。

縄文時代中期後葉の土器組成（第Ⅰ群－ｃ～ｉ類）は昭和53年度の調査結果と大差ないものであったが、第Ⅰ群－ｄ類土器は、口縁部文様帯が退化・縮少化し、新しくなる要素を有していた。包含層出土の土器とはいえ、こうした傾向を持つ第Ⅰ群－ｄ類土器の出土量に対し、第Ⅰ群－ｃ・ｅ・ｆ・ｇ類土器がきわめて少量であったことは興味深い。昭和54年度出土土器における中期後葉の土器組成率は、昭和53年度第２号住居跡の伴出土器群に近似している。

ii）石　　器

昭和54年度の発掘調査で出土した石器は、石鏃20点　石錐１点　スクレイパー１点　石斧１点　石錘５点などである。ほかに剥片の一部を使用したスクレイパー的剥片、石片、礫などがポリコンテナー（24×39×７cm）２分の１程度出土しているが、紙面の都合上図示しえなかった。

出土地点は、ほとんど包含層中出土のものが多く、遺構内出土のものと分離が不可能であった。なお石鏃の分類については、昭和53年度調査のもの（吉岡他1979）を適用したが、一部細分した。

石　鏃（第15図－１～20）

20点出土し、前回調査時よりも多数得られた。形態も豊富でいくつか細分が可能になった。

ａ類（第15図－１～４）

昭和53年度調査のａ類にあたる抉りの深い無茎鏃である。第15図－１～４の４点出土した。押圧剥離は入念で、基部調整の抉りが深く細身の第15図－１・２、若干抉りがあまく、幅広の第15図－３・４がある。すべて黒曜石製である。

ｂ類（第15図－５～14）　10点出土した。形態により３細分した。

ｂ－１類（第15図－５～11）　７点ともっとも多く出土し、昭和53年度調査でｂ類としたものである。比較的小型のもので、抉りはａ類ほど深くないが、入念に基部調整加工がなされ、ａ類とｂ－２類との中間的な形態を示す。若干細身な第15図－６、先端を細く仕上げた第15図－10などａ類に類似する面もあるが、１次剥片の剥離面を多く残した剥片鏃とでもいえる第15図－６～８、押圧剥離が入念な第15図－９～11などが見られ、バラエティーに富んでいる。すべて黒曜石製である。

ｂ－２類（15図－13・14）　昭和53年度調査では出土をみていない。厚手の剥片を素材にするため、基部調整は入念になされるものの、抉りの浅いものを本類とした。第15図－15は幅狭ではあるが、ずんぐりとし、第15図－14は幅広で基部調整を除いて片面加工石鏃とでもいえるものである。２点とも黒曜石製である。

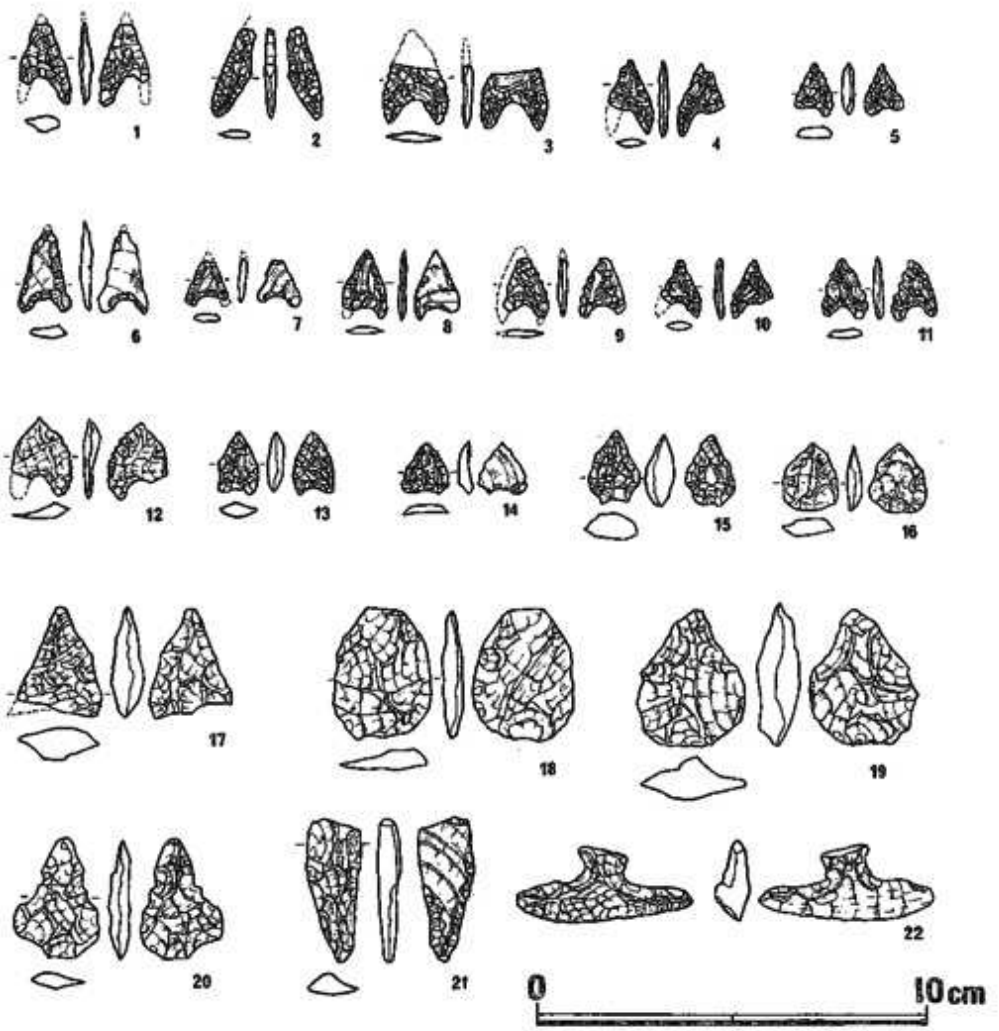
ｂ－３類（第15図－12）　形態的にはｂ－１類と同じであるが、若干大型で、幅広の第15図－12を本類とした。おそらく幅広の頁岩製の剥片を素材としたため、第15図－12のような形態

に仕上げられたものと考えられる。b－1類同様、基部調整の抉りはやや深く、2次調整の押圧剥離も入念である。

c類　今回の調査では出土をみなかったが、b－3類に比べやや肩が張っており、五角形状を呈する。

d類（第15図－15・16）　押圧剥離が入念に行われるものの、基部調整の抉りがほとんど加えられないものである。昭和53年度調査時のd類としたものより底辺が直線的でなく、むしろe類の不定の三角形鏃を小形化したものに近い。2点とも完形で、作りは厚手で、押圧剥離が粗雑に見える。

e類（第15図－17～20）　粗雑な押圧剥離が施された比較的大型の石鏃を本類とする。形態は底辺が直線化する第15図－17を除いて、概して木葉形に近い不定形を呈する第15図－18～20がある。第15図－18～20などは、石鏃としての用途よりも両面加工のスクレイパーや石錐など

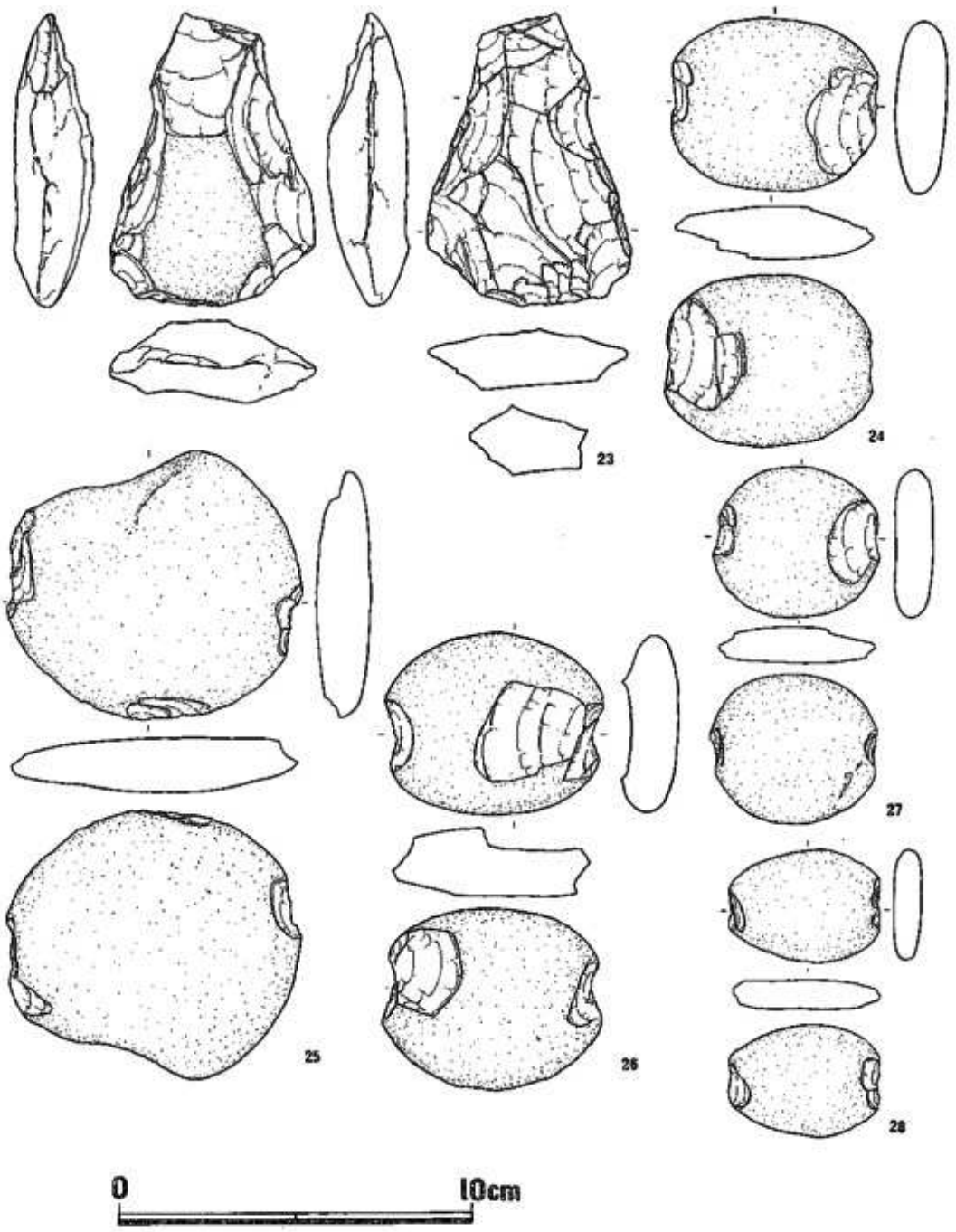


第15図　昭和54年度出土石器実測図（1）

の用途を考えた方が良いかもしれないが、剥離技法、形態より石鏃としておきたい。

石　錐（第15図－21）

厚手の縦長剥片の両側縁を押圧剥離し、先端を尖らせたつまみのつかない石錐である。押圧剥離は表面入念に、裏面の先端に近い側縁に若干施しており、一部１次剥離面を残しているため断面三角形を呈している。側縁に若干の自然面を残す。



第16図　昭和54年度出土石器実測図（２）

（単位 cm g）

	No	層位	種類	長	幅	厚	重	石質	備考
1	S-154	Ⅲ層	石鏃	(2.0)	(1.3)	0.4	0.6	黒曜石	脚欠損
2	S-210	Ⅲ層	石鏃	(2.4)	(0.8)	0.3	0.45	黒曜石	脚のみ
3	S-123	Ⅲ層	石鏃	1.6	(1.7)	0.3	0.65	黒曜石	先端欠損
4		表採	石鏃	1.9	(1.0)	0.2		黒曜石	脚欠損
5	S-200	Ⅲ層	石鏃	1.2	1.1	0.2	0.25	黒曜石	先端欠損
6	S-167	Ⅲ層	石鏃	(2.1)	1.3	0.3	0.6	黒曜石	
7		表採	石鏃	(1.1)	1.0	0.2		黒曜石	先端 脚欠損
8	S-27	Ⅱ層	石鏃	1.7	1.2	0.2	0.3	黒曜石	脚欠損
9	S-281	Ⅲ層	石鏃	(1.5)	(1.1)	0.3	0.4	黒曜石	脚 先端欠損
10	S-216	Ⅲ層	石鏃	(1.5)	(1.0)	0.2	0.2	黒曜石	脚欠損
11	S-89	Ⅲ層	石鏃	1.5	1.1	0.3	0.3	黒曜石	
12	S-173	Ⅲ層	石鏃	2.0	1.6	0.4	0.8	頁岩	脚欠損
13	S-85	Ⅲ層	石鏃	1.6	1.0	0.4	0.6	黒曜石	
14	S-454	Ⅲ層	石鏃	1.3	1.2	0.3	0.4	黒曜石	脚欠損
15	S-244	Ⅱ層	石鏃	1.8	1.3	0.7	1.3	黒曜石	
16	S-161	Ⅲ層	石鏃	1.8	1.5	0.4	0.9	凝灰質頁岩	
17	S-54	1層	石鏃	2.7	2.2	0.8	3.3	チャート	脚欠損
18	S-315	Ⅱ層	石鏃	3.0	2.8	0.5	7.0	凝灰質頁岩	
19	S-82	Ⅲ層	石鏃	3.5	2.9	1.1	8.3	凝灰質頁岩	
20	S-447	Ⅲ層	石鏃	3.1	2.2	0.5	2.7	凝灰質頁岩	脚欠損
21	S-26	Ⅲ層	錐	3.6	1.4	0.5	3.1	凝灰質頁岩	
22	S-5	Ⅲ層	スクレイパー	2.0	4.5	0.5	3.8	凝灰質頁岩	
23	S-1	Ⅱ層	石斧	8.3	5.8	2.2	106.2	珪質頁岩	
24	S-11	Ⅱ層	石錘	5.8	4.9	1.5	62.4	砂岩	
25	S-6	Ⅲ層	石錘	8.3	7.8	1.5	140.5	砂岩	
26	S-12	Ⅱ層	石錘	6.2	5.1	1.9	77.1	砂岩	
27	S-513	Ⅰ層	石錘	4.7	4.3	1.0	30.2	砂岩	
28	S-290	Ⅳ層	石錘	4.2	3.2	0.8	18.3	砂岩	

第1表　昭和54年度出土石器計測表・石材一覧表

スクレイパー（第15図－22）

一般に横形石匙といわれるスクレイパーである。表面の押圧剥離は表面入念に、裏面はつまみを作出するため抉りを入れているほかは、1次剥離面を残している。横幅に比べて縦幅のない石匙である。

石　斧（第16図　23）

第16図－23に図示した小形の打製石斧が1点出土した。一般に撥形石斧といわれるもので、肉厚に仕上げられ、表面に一部自然面を残し、裏面は刃部を中心として入念に剥離を行っている。

石　錘（第16図　24～28）

扁平な楕円形の自然礫を用いて、長軸方向の両縁を両面剥離で仕上げた打製石錘である。長軸8.3cm　短軸7.8cm　重さ140.5ｇの大型の第16図－25のようなもの、長軸6 cm 前後　短軸5 cm 前後　重さ60～80ｇの中型の第16図－24・26のようなもの、第16図－27・28のような長軸4 ～ 5 cm　短軸3 ～ 4 cm　重さ20～30ｇ前後の小型のものとバラエティーがある。

このように今調査で出土した石器は、時期の確定しえた遺構よりの出土はなかったものの、昭和53年度調査の結果とも考え合わせると、いくつかの特徴が指摘できると思われる。

1. 石鏃、石錘の石器組成率の割合が高い。
2. 石鏃は抉りの深いものと浅いものとバラエティーに富んでいるが、原則として無茎石鏃である。e類とした大型石鏃、c類とした五角形鏃などが特徴的である。石材質は黒耀石が主だが、頁岩、硅岩なども含んでいる。
3. 石鏃は打製のものが主体を占めるが、法量は大～小型のものとバラエティーに富み、その使用目的が多岐にわたるものと思われる。
4. 横形石匙とよばれるスクレイパーが特徴的に含まれている。
5. 敲打器、磨石などの出土もあり、石器組成のバラエティーが感じられる。

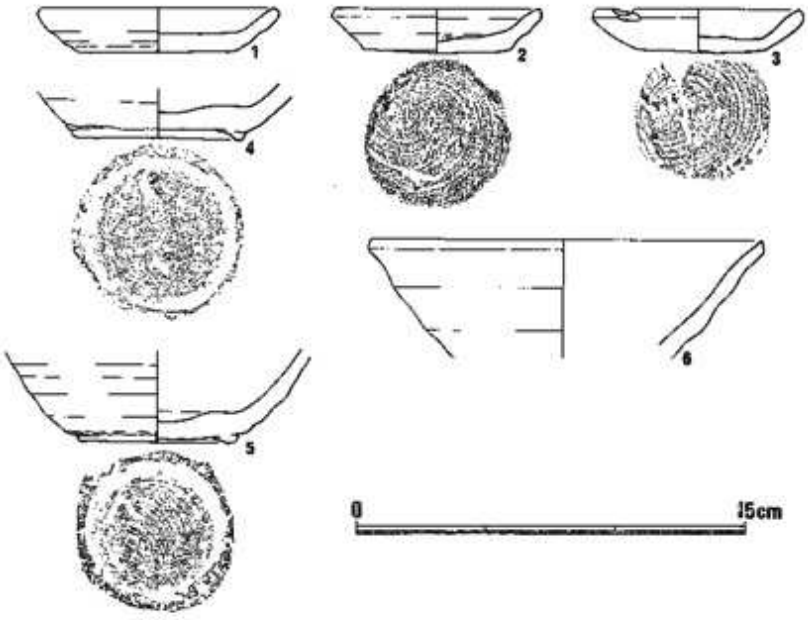
以上の点は、中期後葉を中心とする長者平遺跡の石器群の特性と、長者平遺跡の集落址の経済基盤を考えるうえで、興味深い事実を内包しているものといえ、今後の資料の増加をまって順次明らかにしていきたい。

第5節　古墳時代以降の遺物

昭和54年度の発掘調査において出土した古墳時代以降の遺物は土器のみである。古墳・奈良時代に属する須恵器・土師器片は、南区の第Ⅱ・黒褐色砂礫質泥層中に多く、中世の山茶椀・小皿片は東区に集中していた。昭和54年度第1・2号墳・周溝状遺構・中世掘立柱柱穴群に伴っていたものと考えられる。墨書土器（山茶椀）が1点出土している。

i）古墳時代（須恵器）

坏蓋（第18図－4・5・11）　口径9.5～10.0cm を測る。第18図－4・11は須恵器遠考研編年第Ⅲ期後半と第Ⅳ期前半の中間的要素を持つ。法量的には小型化しているが、第18図－4



第17図　昭和54年度出土山茶埦・小皿実測図

の器高は高く、肩部に段を残すなど、その形態は第Ⅲ期的である。昭和54年度第２号墳周辺の第Ⅱ層から出土した第18図－５は、坏蓋・坏身の形態が逆転した第Ⅳ期後半に属する。

坏身（第18図－１～３）　最大径13.7cm　器高3.6～4.4cm を測る。底部の約３分の１を回転ヘラ削り調整し、内外面を回転ナデ調整する。遠考研編年第Ⅲ期後半に属し、６世紀後半に比定される。第18図－１は立ちあがりが急で深く、若干時期の遡る要素を有している。

平瓶（第18図－８～10）　口縁部径7.5cm 前後を測る。第18図－８はやや大型である。第18図－10は２条の沈線を、第18図－８では２条の沈線と波状文をめぐらす。

ii）**奈良時代**（須恵器）

坏蓋（第18図－６）　口径15.2cm　器高3.1cmを測る。扁平な宝珠型ツマミを有し、身受けの返りは若干外に開く。天井部の約２分の１を回転ヘラ削り調整する。

坏身（第18図－７）　口径13.3cm　器高4.2cm を測る。第18図－６と対にならないが、ともに近接して周溝状遺構から出土した。断面三角形をなす高台は外に張り、底部中央が高台より下方に位置する。川江編年Ⅴ期前（川江1979）に対比され、奈良時代初頭に位置づけられる。

iii）**中　　世**

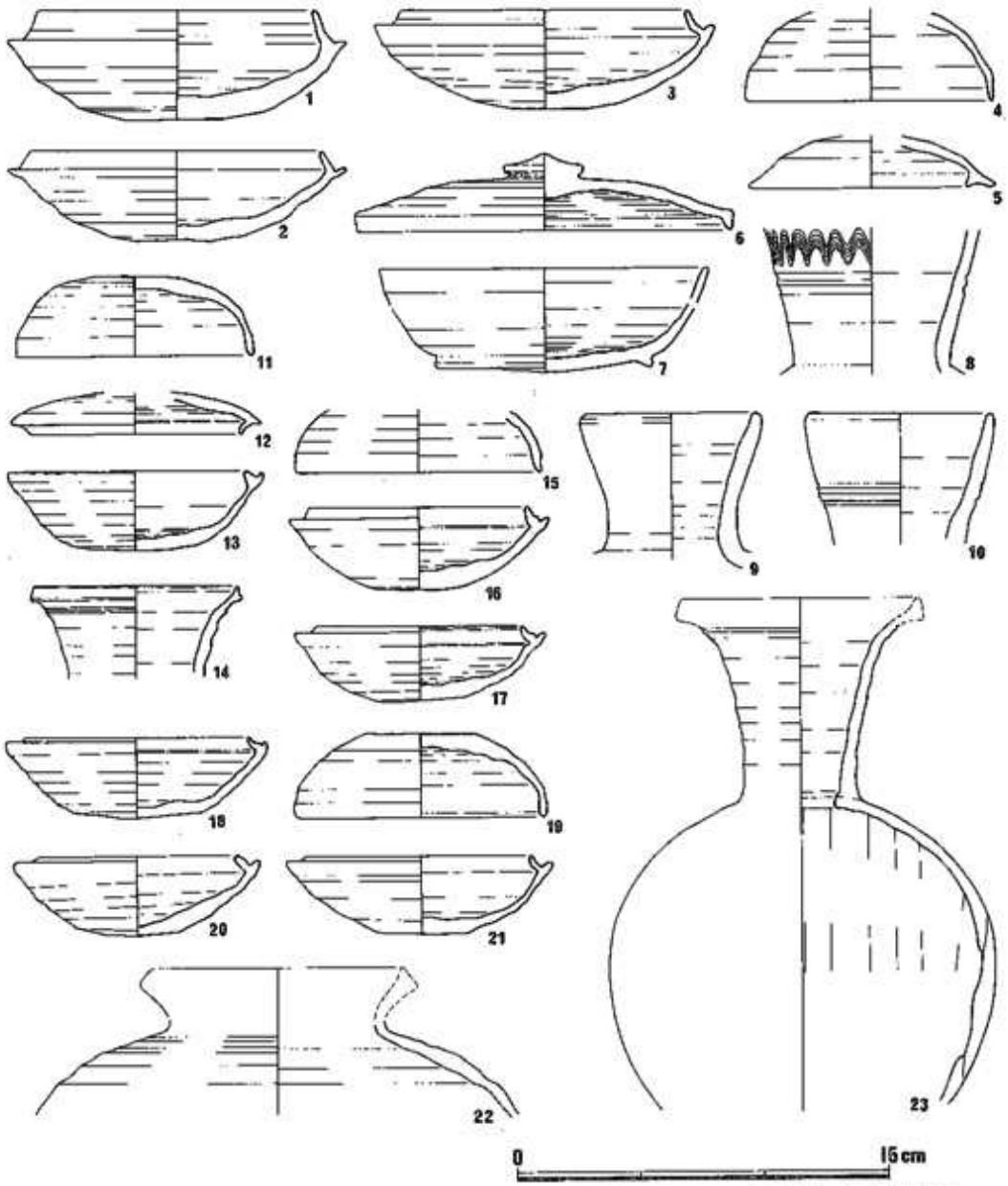
小皿（第17図－１～３）　口径8.1～9.3cm　器高1.6～1.7cm を測る。底面に明瞭な糸切り痕を残す。第17図－３は口縁部の一部を打ち欠き、燈明皿として使用している。

山茶埦（第17図－４～６）　口径15～16cm を測る。籾痕のあるひしゃげた高台を有し、底面に糸切り痕を残す。第17図－６では口端外面を平坦に整形している。

墨書土器（第17図－５　図版11）　東区（Ｅ２－６区）第Ⅱ層から出土した。筆の運びはぎこちないが「大」と読める。

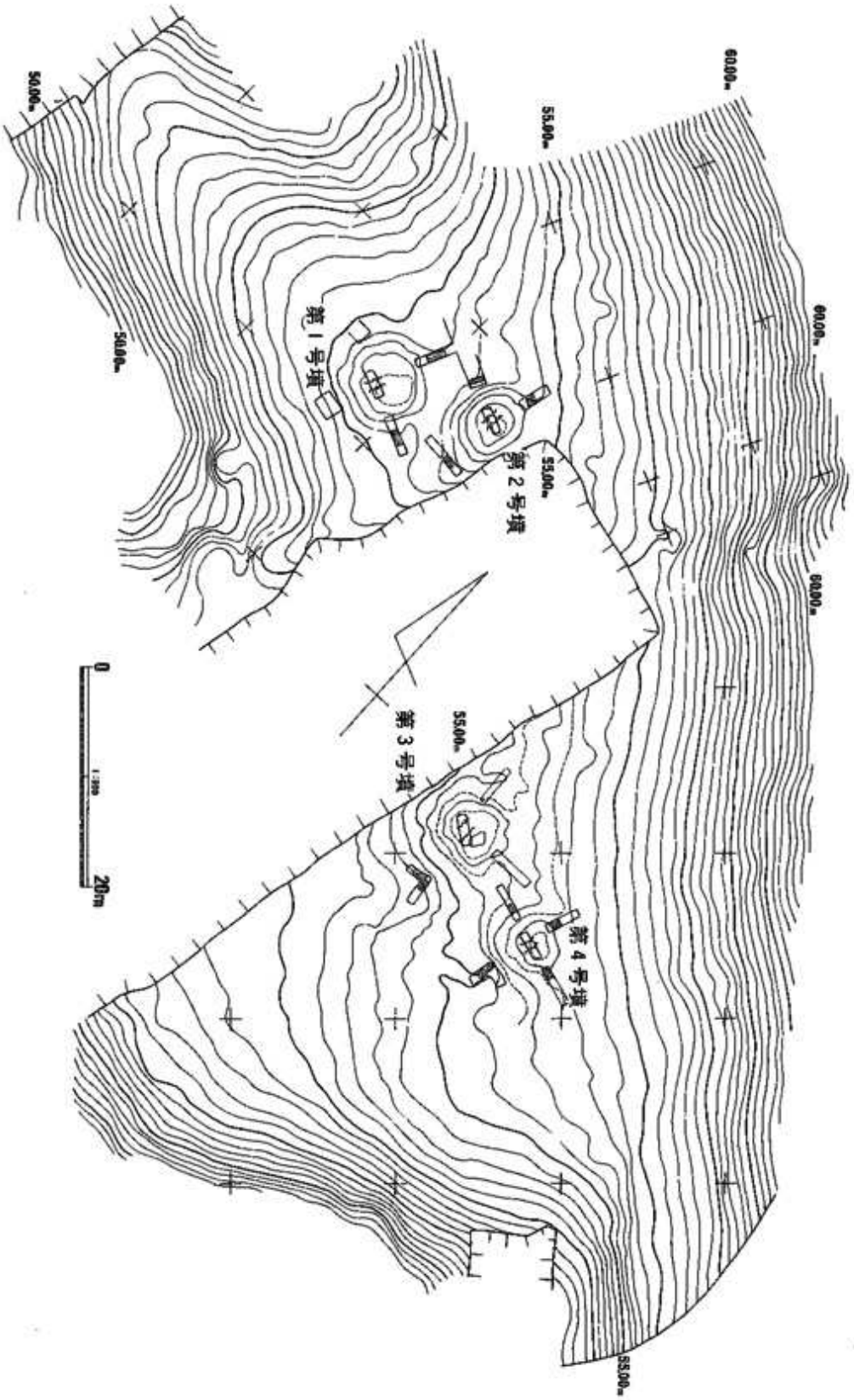
第３章　長者平古墳群Ｃ支群

従来、長者平遺跡と同一の段丘縁にのみ分布する群集墳を長者平古墳群（『静岡県教委1979』の袋井—No.159）と呼んできたが、ここで言う「長者平古墳群」とは、小支谷を挟んで南の段丘縁・丘陵上に成立した駒ケ谷古墳群（『静岡県教委1979』の袋井—No.171）と、今回測量調査した４基の小円墳群（Ｃ支群）を含んでいる。長者平・駒ケ谷古墳群とＣ支群は近接しており、段丘縁に帯状に並ぶ分布形態も類似することから、長者平古墳群をＡ支群、駒ケ谷古墳群



第18図　昭和54年度第１・２号墳・周溝状遺構・長者平古墳群Ｃ支群出土土器実測図

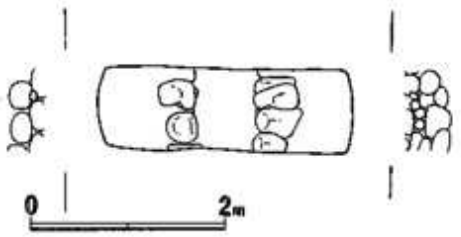
１・２＝昭和54年度第１号墳出土　３・４・11＝昭和54年度第２号墳出土　６・７＝周溝状遺構出土　５・８～10＝包含層出土　12～14＝Ｃ支群第１号墳出土　15～17・23＝Ｃ支群第２号墳出土　22＝Ｃ支群第３号墳出土　18～21＝Ｃ支群第４号墳出土



第19図　長者平古墳群C支群周辺地形図

をB支群として、3支陵にわたる50数基の古墳群を一つの有機的なまとまりと捉えておきたい。

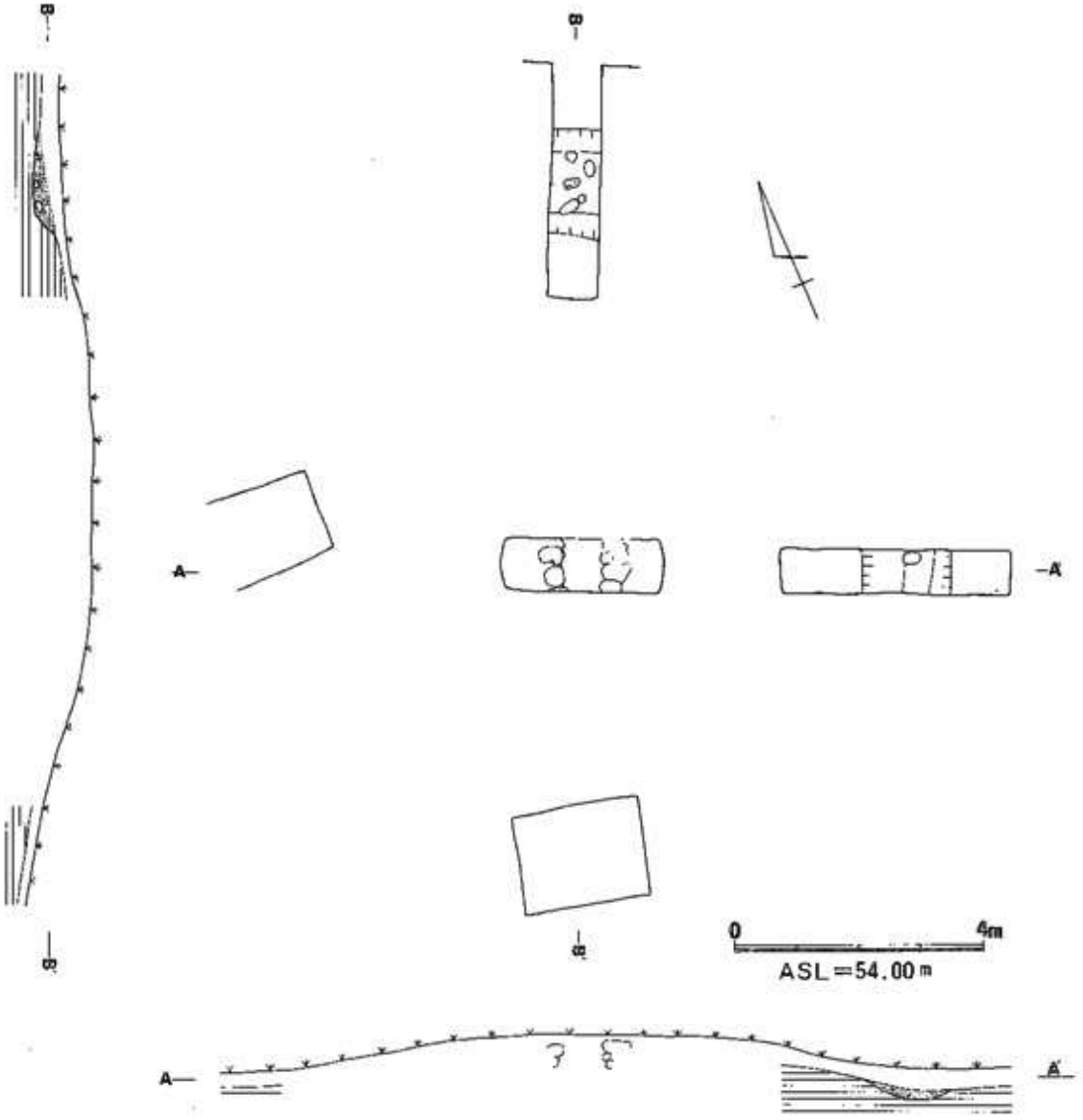
C支群はB支群から東へ約400m 離れ、丈陵南裾の小規模な張り出し部に位置している。張り出し部東半には古墳の分布は認められず、すでに茶園となっている第2・3号墳の間に、かつて数基の古墳が築造されていたとしても、C支群は5基前後からなり、きわめて小規模であったと考えられる。



i) C支群第1号墳

径約9.0cm　高さ約0.9m の円墳である。

東・北側の周溝（幅1.4～1.7m）は明瞭で、遺



第20図　長者平古墳群C支群第1号墳実測図

跡基盤層を約15cm掘り込んでいたが、支谷に面した西・南側に周溝は検出されなかった。断面U状をなし、数個のこぶし大礫が落ち込んでいた。

墳丘のほぼ中央に、南に向って開口する横穴式石室（上端幅約0.6m）を構築している。根石の状況は明らかでないが、側壁は20～30×30～50cm の自然礫を小口積し、持ち送りが顕著である。西壁の石材は均一で、その積み方も規則的であったが、東壁の礫間には多くのこぶし大礫が詰められていた。天井石は認められなかった。

石室内の撹乱土から出土した須恵器坏蓋・坏身・フラスコ瓶口縁部を第18図に示した。当古墳の営まれた時期は7世紀前半と考えられる。

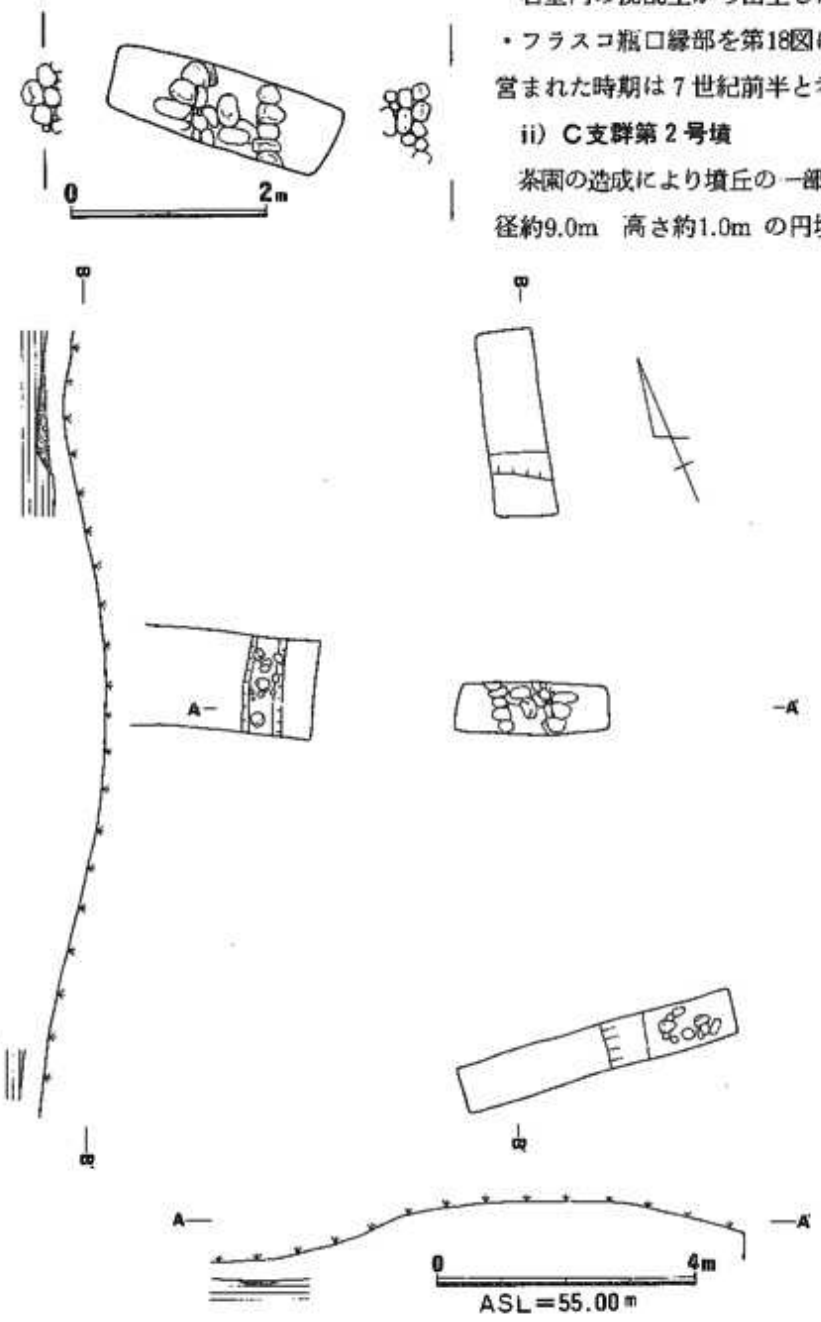
ii）C支群第2号墳

茶園の造成により墳丘の一部が破壊されていた。径約9.0m　高さ約1.0m の円墳である。第1号墳に隣接する。

西側の周溝は幅が狭く（約0.6m）覆土（黒色有機質土）中に多くのこぶし大礫を含んでいた。南にのびる溝状遺構は前溝（墓道）と考えられる。

墳丘のほぼ中央に、第1号墳に比べやや小さな楕円礫（15～20×15～30cm）を小口積し、南向きの横穴式石室（上端幅約0.6m）を築いていた。東西壁とも均一な石材を規則的に積み上げている。

前溝内より一括出土した須恵器坏



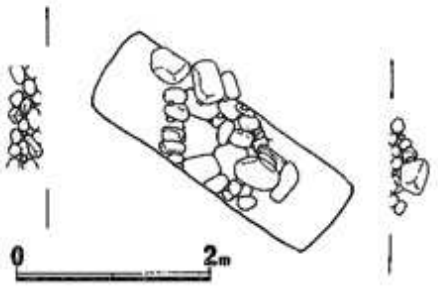
第21図　長者平古墳群C支群第2号墳実測図

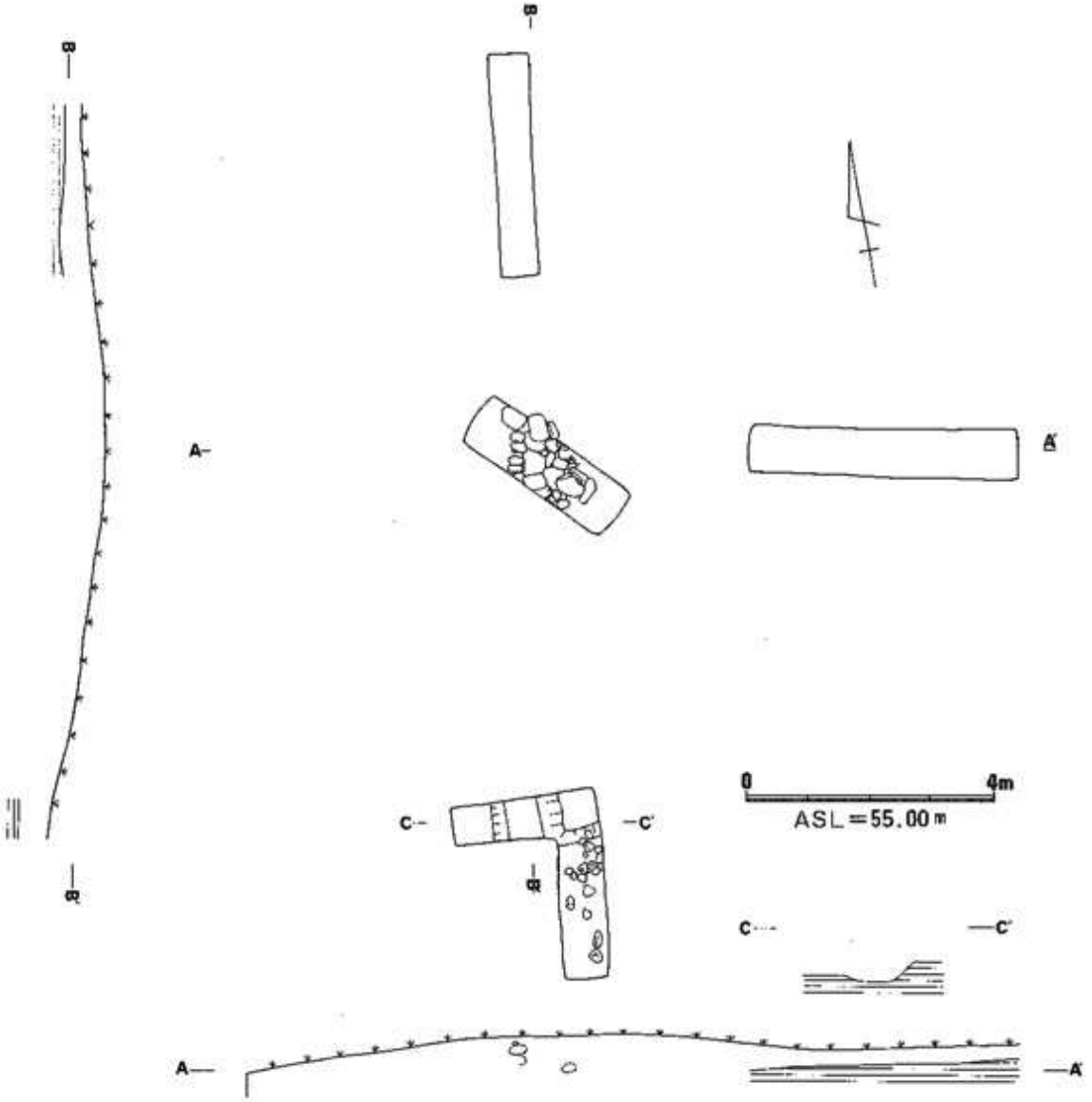
蓋・坏身・フラスコ瓶を第18図に示した。第１号墳と近時し、７世紀前半に営まれていたと考えられる。

iii) C支群第３号墳

西側の墳丘裾は破壊され、周溝も確認されなかったため、実径は明らかでないが、目で見た墳丘規模は径10～11m（高さ約0.7m）と、他の３基に比べやや大形である。円墳と思われる。

南に向い開口する横穴式石室（上端幅0.5～0.6m）は約10×20～25cm大の自然礫を小口積して築





第22図　長者平古墳群C支群第３号墳実測図

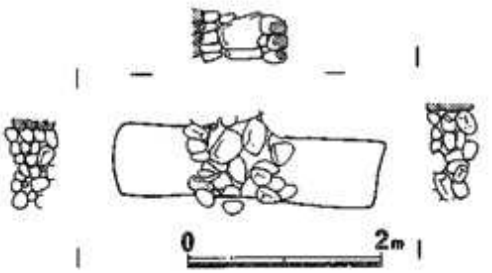
かれていた。東壁の最上段に原位置をとどめた大型楕円礫（20～25×約50cm）が確認できる。石室内に落ち込んでいた大型楕円礫も、構築当初、側壁の上段に積み上げられていたものであろう。

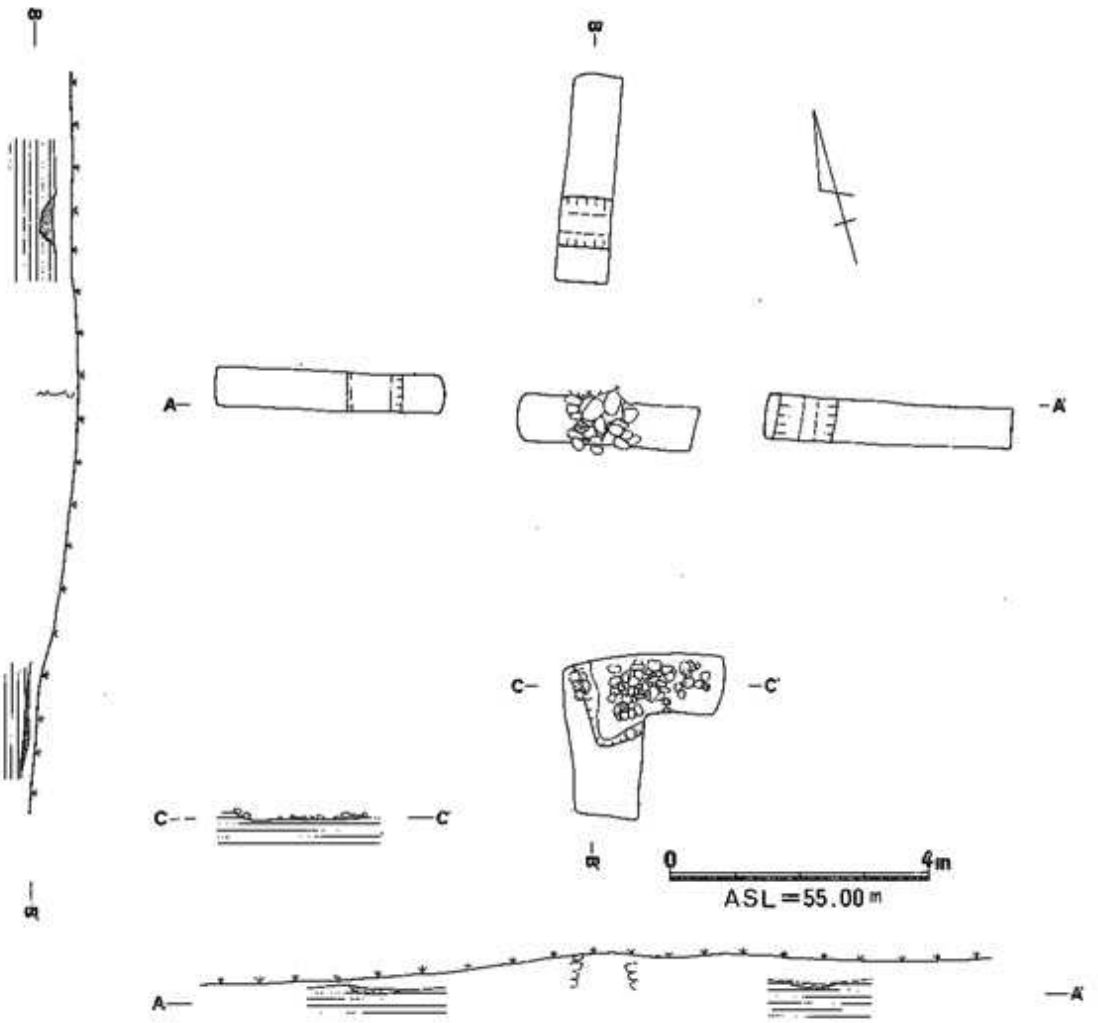
石室内の撹乱土より出土した須恵器短頸壺を第18図に示した。7世紀前半に営まれていたと考えられる。

iv）C支群第4号墳

全周すると思われる周溝（幅0.8～0.9m　深さ0.1～0.25m）の内縁径は南北7.6m　東西5.6mと小規模で、墳丘の平面形は楕円形をなす。第3号墳に隣接する。

墳丘南裾に南西端に角のある落ち込みが見られ、多量のこぶし大礫が集積していた。





第23図　長者平古墳群C支群第4号墳実測図

南向きの横穴式石室（奥壁部上端幅約0.6m）は、第３号墳と同様の自然礫(約10×20～25cm)を小口積し、石室内に大型楕円礫が数個落ち込んでいた。奥壁は約30×50×15cm の盤状礫を２段に積み上げていた。

南裾の集石間より出土した須恵器坏蓋・坏身を第18図に示した。７世紀前半に営まれていたと考えられる。

長者平古墳群Ｃ支群に伴った須恵器坏蓋・坏身は最大径10.0～10.7cm を測り、須恵器通考研編年(山村他1966) 第Ⅳ期前半に属するものが主体をなす。第18図—12は新しくなるものの、Ｃ支群を構成する４基の小円墳は、ほぼ同時に成立し、営まれたと見て大過ないように思われる。第３・４号墳の主体部構造はよく似ており、その立地を見ても、第１・２号墳、第３・４号墳の被葬者はきわめて緊密な関係にあったと考えられる。

第４章　まとめにかえて

昭和54年度の発掘調査において検出された遺構の残存状態は、昭和53年度に比べ良好なものではなかったが、長者平遺跡・長者平古墳群を理解するうえで欠くことのできない新たな資料、知見を得た。以下列記しまとめにかえたい。

1. 縄文時代中期初頭および後期初頭に位置づけられる土器群（第Ⅰ群—ａ・ｂ類土器・第Ⅱ群—ａ類土器）の出土は、今調査最大の成果である。昭和53年度の出土土器から長者平縄文集落の形成時期は中期後葉にあると考えてきたが、その成立期が中期初頭まで遡る可能性を高めた。

   また包含層中の土器とはいえ、加曽利Ｅ式土器の新段階に対比される第Ⅰ群—ｄ類土器と第Ⅰ群—ｃ・ｅ・ｆ・ｇ類土器の出土量に著るしい差が認められたことは、中遠地方中期後葉の土器編年を考えるうえで参考になろう。
2. 長者平遺跡南側の段丘張り出し部から２基の古墳（昭和54年度第１・２号墳）が検出され、小円墳群は途切れることなく、段丘南縁に連なり分布することが明らかとなった。長者平古墳群Ｃ支群は、ほぼ同時（７世紀前半）に成立した小円墳４基により構成されていた。
3. 奈良時代初頭の周溝状遺構が検出され、長者平古墳群の終末状況を物語る資料として注目される。
4. 中世掘立柱柱穴群の分布域をほぼ確定することができた。出土遺物（墨書土器等）を含め、中世の長者平遺跡に関する検討は、今後に残された課題である。

現地調査、資料整理にあたり多くの方々からご教示を得た。特に土器の分類に関し、加藤賢二氏には格別のご指導をいただいた。挿図の作成では鈴木敏則　松井一明　西井幸雄諸氏の手を煩わした。文末ではありますが、ここに記して深く感謝いたします。

参 考 文 献

古岡伸夫他　1979　「長者平遺跡－昭和53年度緊急発掘調査概報－」　袋井市教育委員会

鮫島　輝彦　1978　「フィールドワーク・静岡の地学」

岡本　　勇　1955　「静岡県小笠郡大畑遺跡」　『昭和26年度日本考古学年報』　日本考古学協会

市原　壽文　1978　「袋井市大畑遺跡－1977年度の発掘調査－」　袋井市教育委員会

川井　正一　1976　「袋井市地蔵ケ谷横穴群の問題点」　『森町考古』10　森町考古学研究会

1972　「袋井市雲座古墳Ｄ単位群発掘調査概報」　『袋井市文化財調査報告書第１集』　袋井市教育委員会

川江　秀孝　1979　「静岡県下出土の須恵器について」　『静岡県考古学会シンポジューム２　須恵器－古代陶質土器－の編年』　静岡県考古学会

平野吾郎他　1978　「山本山古墳群」　袋井市教育委員会

巽　三郎他　1969　「鷹島－鷹島遺跡発掘調査報告書－」　南紀考古同好会

今村　啓爾　1972　「宮ノ原貝塚」　武蔵野美術大学考古学研究会

久永　春男　1960　「咲畑貝塚」　愛知県知多郡師崎町立師崎中学校

長崎元広他　1979　「中部高地縄文土器集成　第１集－縄文中期後半の部・その１」　中部高地縄文土器集成グループ

間壁忠彦他　1971　「里木貝塚」　『倉敷考古館研究集報』第７号　倉敷考古館

神村　　透　1978　「結節縄文をつけた一群の土器－飯田地方縄文中期終末」　『中部高地の考古学－長野県考古学会15周年記念論文集』　長野県考古学会

向坂　鋼二　1970　「遠江における縄文土器の変遷」　『遠江考古学研究』４　遠江考古学研究会

加藤　賢二　1972　「広野Ｃ式土器」　『なうよ』№３・５

今村　啓爾　1977　「称名寺式土器の研究（上）」　『考古学雑誌』第63巻第１号　日本考古学会

1977　「称名寺式土器の研究（下）」　『考古学雑誌』第63巻第２号　日本考古学会

静岡県教育委員会　1979　「静岡県遺跡地名表」

（付　載）

故早川二二氏が採集した長者平遺跡縄文土器について

水害で家を流された我家の先祖は、高台を求めて約80年前ここに移り住みました。長者平遺跡のある丘陵の南側に位置するこの土地は、地盤が固い、水利が良い、丘陵が北風を防ぐと言う点で家を建てる条件に恵まれた所でした。

丘陵の一部を削り取って家を建て、雑木林を開墾して桑や茶畑を作り、生活の基礎を固めたこの時から、長者平遺跡と私の家とのつながりが生れました。

この土地に第1歩を踏み入れた80年前から土器や石器が採集されてきた事は、すでに亡くなった祖父二二から話を聞いていましたが、このような物が個人の家で保存されてきた事は、周囲の影響もあって、良い事ばかりとは言えなかったようです。

この地域に住む人々は埋蔵文化財と「たたり」と言う言葉を結びつけて考えます。現在でも長者平遺跡に立ち周囲を見回すと、相撲の土俵のような形で残されている土盛りに気がつくと思います。これは、茶園の造成の時に「たたり」を恐れた住民が、人を葬った所さえ手をつけなければよいだろうと、古墳の主体部だけをそのまま残した跡なのです。中には卒塔婆さえ立てる家もあり、このような物を見ると、なおさら気味が悪く、「さわらぬ神にたたりなし。」という格言が頭に浮かんできます。病人、ケガ人、死者が出ると、現代でも誰が言うともなく「たたり」を連想するのは、縄文時代の集落や、数多い古墳のあるこの土地柄なのかもしれません。

戦前、私の家族にも命の短かい人が続いた時、曽祖父仙作は、「地の神様」のとなりに小さな墓標を立て、その下に、採集した遺物を納め、数千年前にこの地に住んだ人々を祀り、我家の幸せを願ったそうです。しかし、納めた物がなんであったのか、今の家族は誰も知りません。曽祖父の心は、中を確認したい私とは違い、そっとしておきたい母の心に引き継がれているようです。

こうした状況にありながら、なぜ祖父二二は長い間、土器や石器に興味を持ち、大切に保存してきたのでしょうか。まず大きな理由として茶の生産を主とした農業を営む私の家では、60アール程の茶畑すべてが遺跡の中にあり、どこを耕しても土器や石器を採集できるという環境にあった事、そして祖父の性格によるものだと思います。明治の報徳運動に熱心で私財を投じても人を助け、町会議員を勤めた仙作の次男として生れた祖父は、「誠心、勤労、分度、推譲」の二宮尊徳の教訓を大切にしていました。だから、質素で無駄のない暮らしに徹底しており、そのためには神仏にもたよらないという頑固さを持っていました。また、新しい知識を吸収しようとする気持も人一倍強く、農業の面でも、牧の原にある茶業試験場へ自転車に乗って見学に行き、茶の優良品種といわれる「やぶきた」を植えたのも、手ばさみを導入したのも豊沢では一番早かったといわれています。このような性格の祖父に、はじめはなにげなく採集した土器や石器の事をもっと詳しく知りたいという願望があったことは確かです。亡くなって荷物の

整理をした時、埴輪の模造品が5点と「埴輪」「古墳の話」などの本が出てきました。これらの中には、家に多くの採集品がある事を人ずてに聞いた著名な方々が訪れた折、祖父にくださった物もあるようで、律気な明治の人間だった祖父には、大きなはげみであり、宝物であったのでしょう。祖父の持っていた知識はほんのわずかであっただろうと思いますが、ほんのわずかな知識があったからこそ、長者平遺跡の採集資料を残す事ができたのです。

18年前、初めてこの家に来た日に祖父が、石鏃、石錘、石斧、縄文土器、金環、国学院大学の学生達の手で復元された茶箱一杯の須恵器を自慢そうに見せてくれました。しかし、それ以前にすでに行方不明になっていた刀や勾玉とともに、古墳時代のものはほとんどなくなってしまいました。

長者平遺跡の名前は、古くから知られていたと聞いています。それは表面採集された土器や石器の量と種類の豊富さによると思うのです。昭和53年度の発掘調査までなぜそれらを報告してくれる人がいなかったのでしょうか。今になって失ったものの大きさを想います。

これから先、今までのようにたくさんの土器や石器を採集する事はできないでしょう。なぜならば、祖父達のように原野をひとくわ、ひとくわ掘りおこす開墾はもうなくなったからです。茶園の改植も、手作業で天地返しするのではありません。昭和53年に初めて発掘調査が行われた頃から、個人の畑の改植にも重機が使われるようになりました。それまでは発掘調査の分層発掘とよく似た方法で、2.5m×1.2m 位の広さで、20cm 程を、スコップ、ジョレン、石箕などを使って掘り下げていったのです。深さ約70cm 程掘ると古い茶の根はとれますから、そこまでを目安としてくりかえします。土は私達の手を少しずつ通りますから、土器も石器も、かなり確実に拾い集められました。母の話によると、このような仕事の中で、祖父は石鏃を集める事に非常に興味を持っていたそうです。過去2回行われた発掘調査に比較して見ると、確かに家にある石鏃の数は多いと思います。この事が縄文人の生活の何を示しているのか今の私には勉強不足で答えられませんが、発掘調査の結果では狩猟にたよらない生活が考えられ、祖父の石鏃を見るとさかんに狩猟が行われた生活であったろうと、まったく逆を想像してしまいます。

それでは、これらの採集場所をどれ程正確に覚えているかといえば、祖父のいない今となっては、残念ながら石剣だけしかわかりません。石剣は昭和52年冬の茶の改植の時、自分も仕事をしていた時で、特殊なものだからはっきり覚えています。夫と二人で「ばかに黒っぽい土だなあ。」と話しながら仕事をしていると、三つに折れたうちの一つを見つけました。折れ口を見て、まだ残りがあるかもしれないと確信を持ってさがしました。三つに折れていましたが、全部揃った時、当時考古学にはまったく興味のなかった私達でさえ、「何か大事なものだろう。」と文化財保護審議委員長の浅井喜作先生に届けたものでした。

層位は今考えて見ると、地山と呼ぶ、小笠山礫層の直上の黒っぽい土の中だったのですが、それが、遺構内の黒なのか、包含層の黒なのかはわかりません。柄の部分が西向きで、三つとも並んだ状態で、地点は昭和54年度発掘区の西方約40m の段丘頂部にあたります。

採集品とは違いますが、遺構として、家のすぐ北側の丘陵では赤く焼けた石が炉跡状に並ん

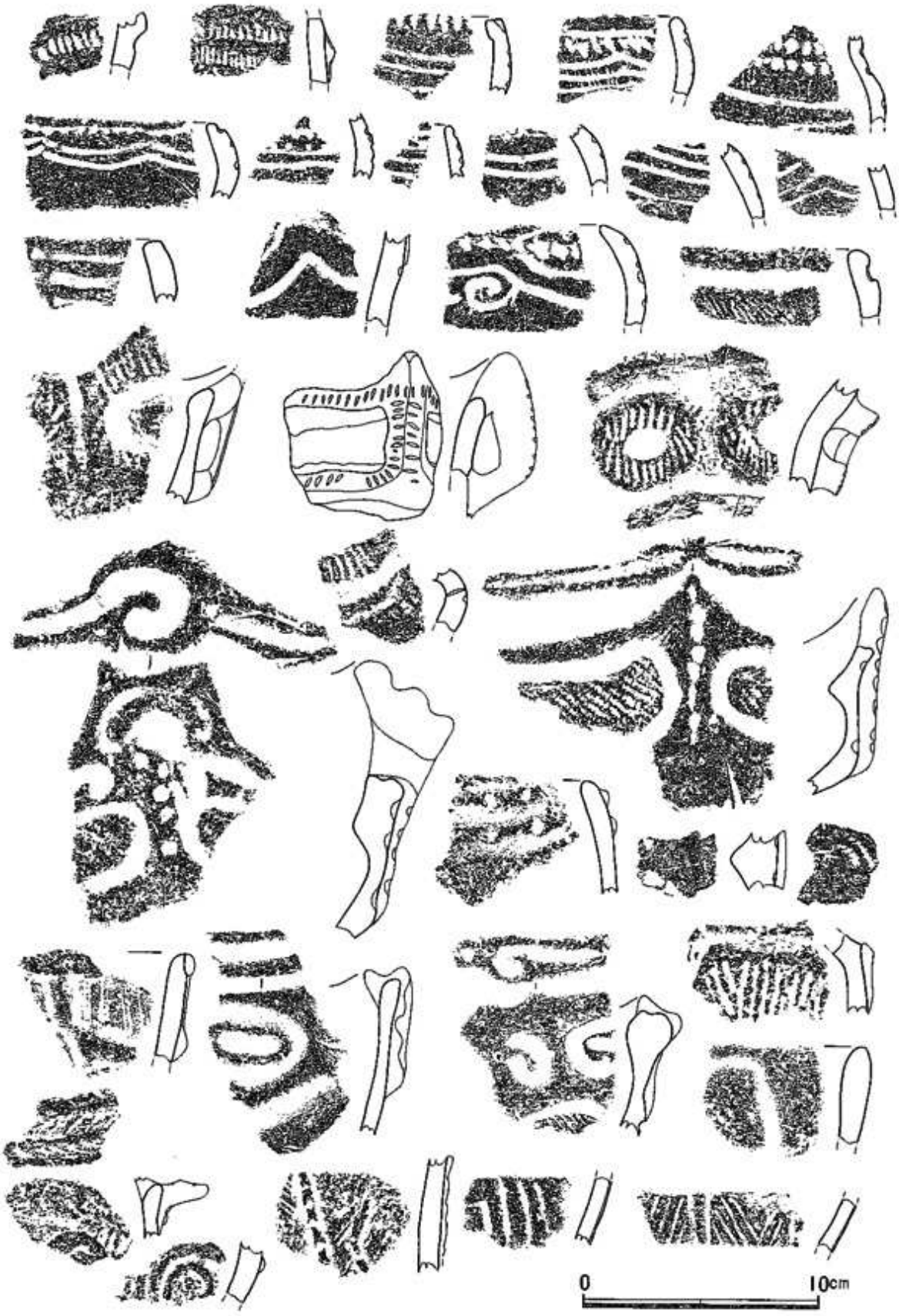
でいたと母が覚えています。発見した場所は、現在長者平遺跡の中心であろうといわれてる所から一段低い西の段丘上にずれますが、この周辺の土器の量はどこよりも多かったようです。

こうして、曽祖父仙作、祖父二二、母喜久枝などの手で拾い集めた縄文土器を今回整理する機会を得ました。これらの土器は長い間軒下のリンゴ箱に入れたまま、放置されていたものです。採集はしたものの、それをどう扱ったらよいのかわからず、雨ざらし、日ざらしにして、何の価値も見つけられなかった月日に心の痛みを感じます。発掘作業や遺物整理などを手伝う事ができて2年たちました。私もここに住みながら、人を介してでなければ長者平遺跡が見えなかったと言う事実に勉強不足を感じています。祖父達がそうであったように、私の一生もこの長者平の中で畑をたがやし、目につく土器や石器を採集して行く事でしょう。その時、一片の土器片から、この地に生活した人々の姿を正しく想像できるようになりたいし、できれば当時長者平に生きた女性達がどのような生活をおくっていたのか考えられるようになりたいと願っています。

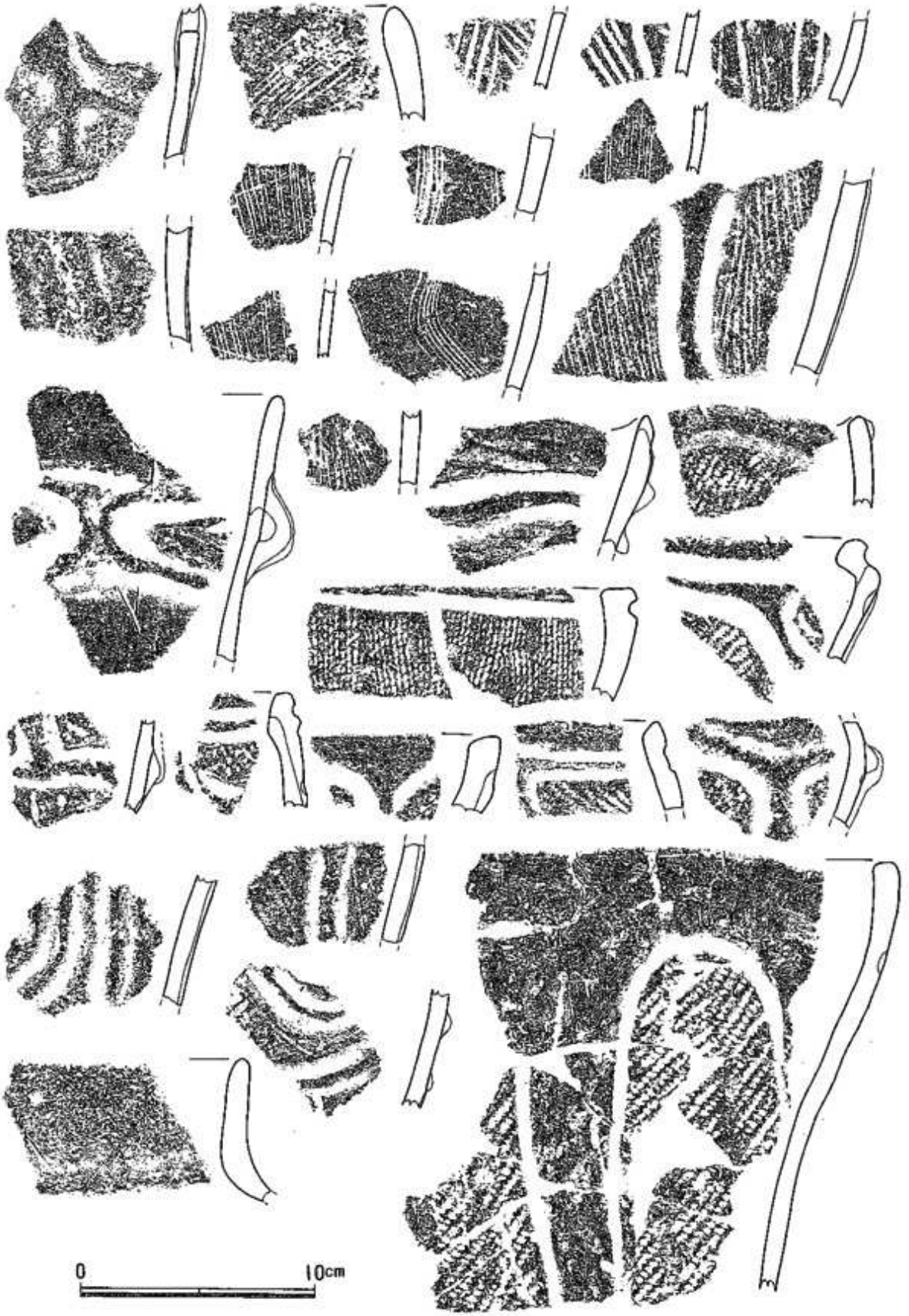
選び出した97点の土器を見て思う事は、勝坂式土器から称名寺式土器まで採集されていた事へのおどろきです。発掘調査でわかった以上に縄文時代の人々が長者平に住んだ時期は長かったのではないかと想像されます。土器に見える文化の交流は、中部高地・関東地方から中国地方にまでおよんでいたとわかり、鉄道や車のない時代を考えると、その活動力・バイタリティーは現代の私達以上であったのではないかと思います。

今回、石器についてはまとめる事ができませんでした。数多い石鏃、石剣、石錘などはまたなにかの機会に報告できますように、少しずつ整理して行きたいと思っています。

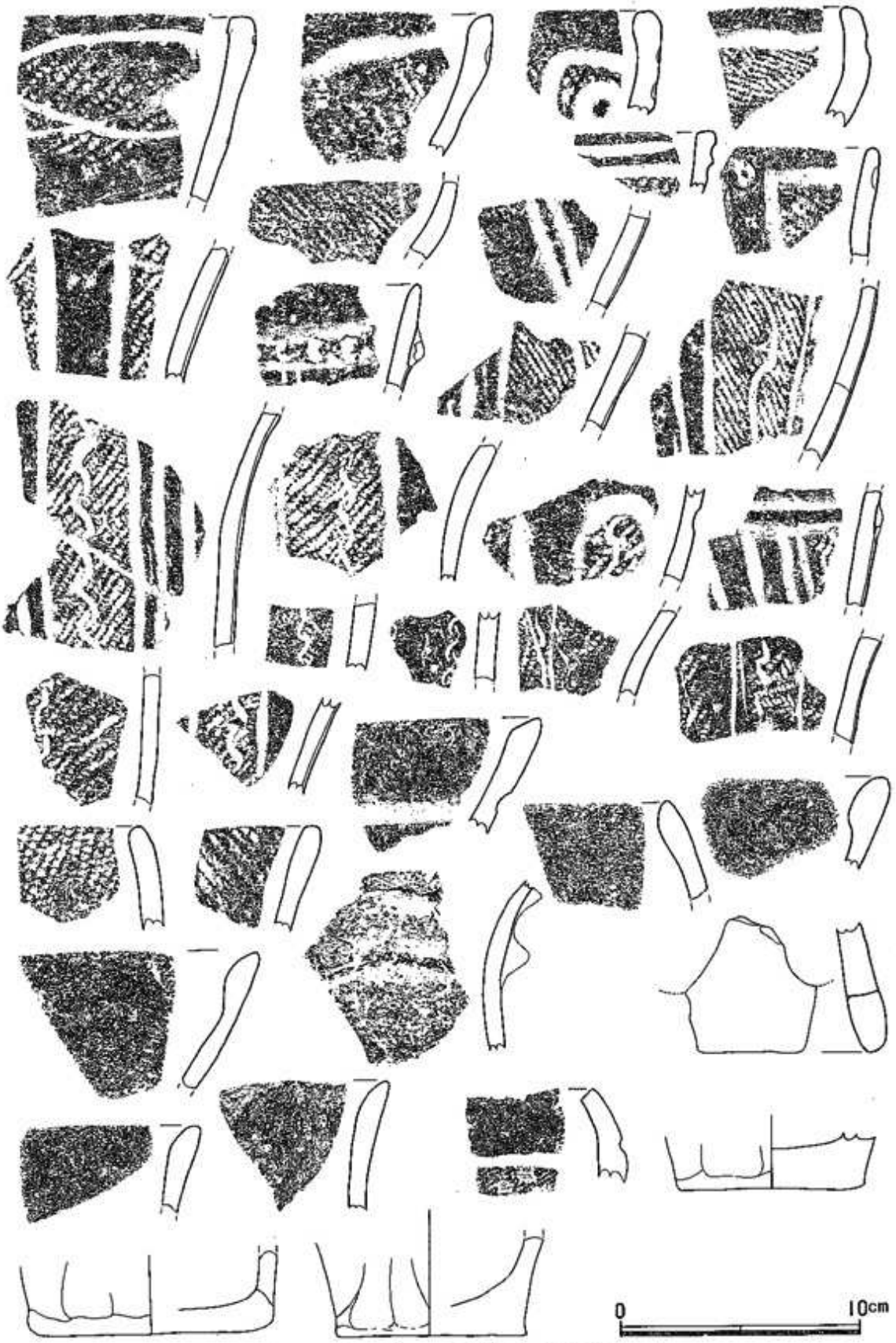
今回、97片の土器を整理してみて自分の勉強不足をつくづく感じております。行きつ戻りつ、少しも前進しなかったように思える2年間でしたが、今回このような機会を得た事に対し、袋井市教育委員会、加藤賢二さん、常に暖かくはげましてくれた多勢の方々に、末筆ながら心より御礼申し上げます。



第1図　故早川二二氏採集縄文土器拓影（1）



第2図　故早川二二氏採集縄文土器拓影（2）



第3図　故早川二二氏採集縄文土器拓影（3）

図版1

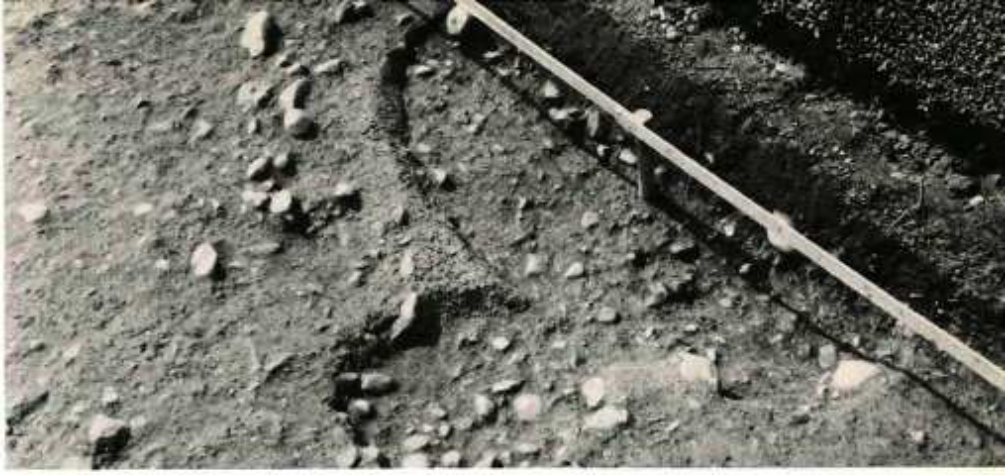
昭和54年度東区(D・E・F・G1・2区)第Ⅲa層上面遺構検出状況(北より)

昭和54年度東区(D・E・F・G1・2区)完掘状況(北より)

昭和54年度東区(A・B・C・D1・2区)第Ⅲb層上面遺構検出状況(北より)

昭和54年度東区(A・B・C・D1・2区)完掘状況(北より)

図版 3



昭和54年度竪穴状遺構（E・F１区）近景（北東より）

昭和54年度屋外炉跡近景（北東より）

(左)（南東より）

(右)（南西より）

(左)（北西より）

(右)縄文土器出土状況

図版 4

昭和54年度土壙状遺構近景
(左)第 4 号土壙
(右)第 5 号土壙

(左)第 6 号土壙
(右)第 7 号土壙

(左)第 8 号土壙
(右)第10号土壙

(左)第11号土壙
(右)第11号土壙（配石除去後完掘状況）

(左)第12号土壙
(右)第13号土壙

図版 5

昭和54年度土壙状遺構近景
(左)第14号土壙
(右)第15号土壙

(左)第19号土壙
(右)無番号土壙（B 2 —a区）

昭和54年度第1号墳検出状況（西より）

昭和54年度第1号墳主体部近景(西より)

図版8

長者平古墳群C支群
第1号墳主体部近景
(左)（南より）
(右)（西より）

長者平古墳群C支群
第2号墳主体部近景
(左)（北より）
(右)東壁の状況

長者平古墳群C支群第2号墳西側周溝完掘状況（南より）

長者平古墳群C支群
第3・4号墳遠景
（北方丘陵上より）

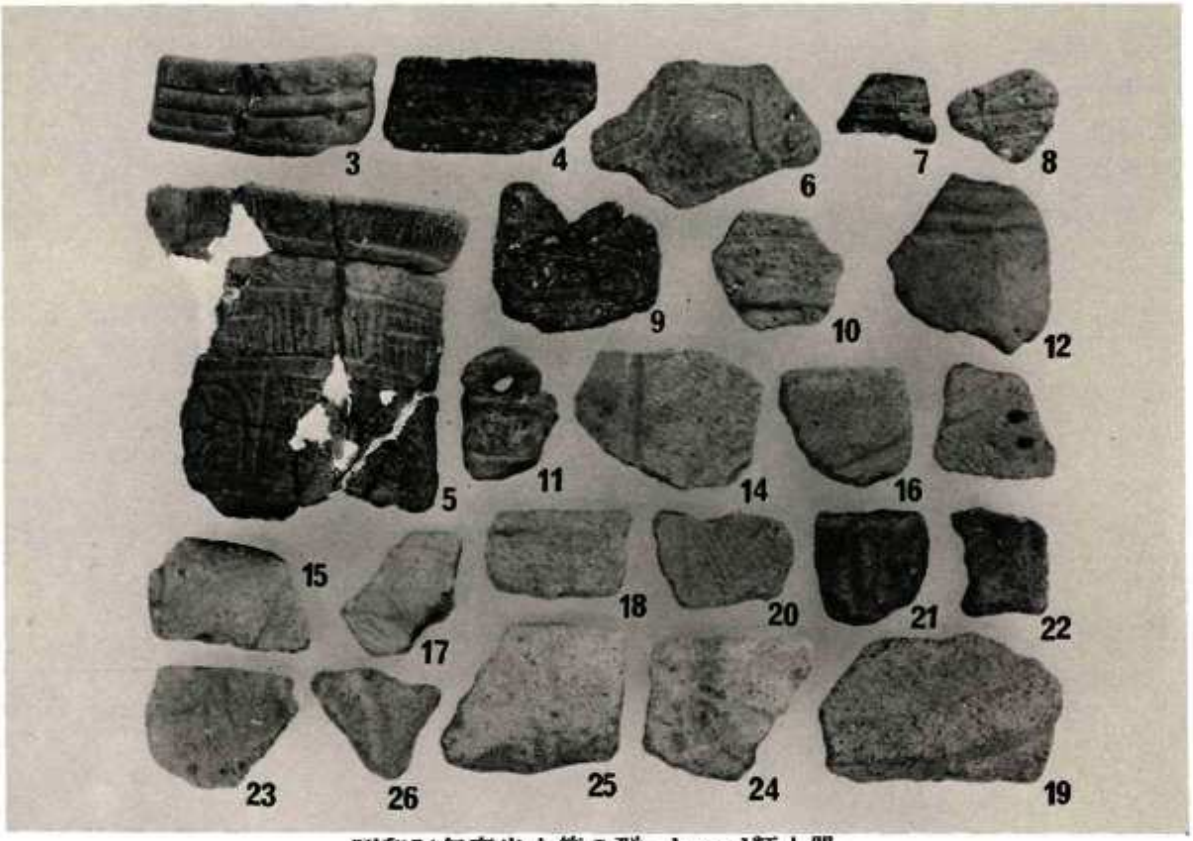
図版9

(左)長者平古墳群C支群第3号墳主体部近景（東より）
(右)長者平古墳群C支群第3号墳前溝部・周溝完掘状況（南より）

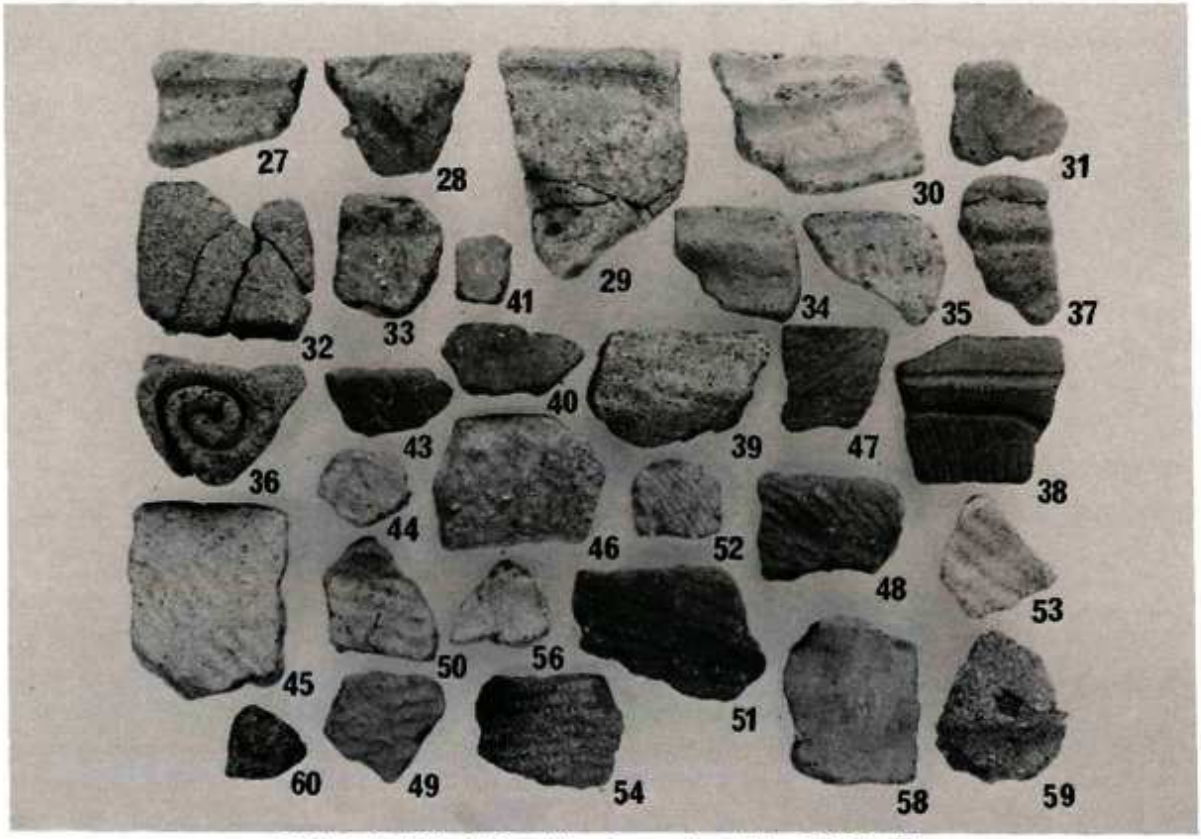
長者平古墳群C支群第4号墳主体部近景（南より）

(左)東壁の状況
(右)西壁の状況

(左)長者平古墳群C支群第4号墳集石近景（西より）
(右)長者平古墳群C支群第4号墳東側周溝完掘状況（南より）

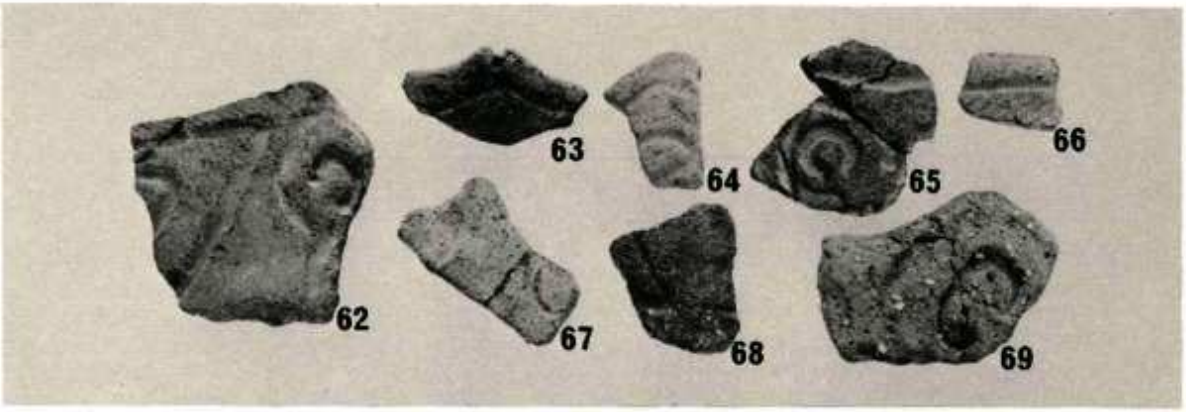


昭和54年度出土第Ⅰ群—b・c・d類土器



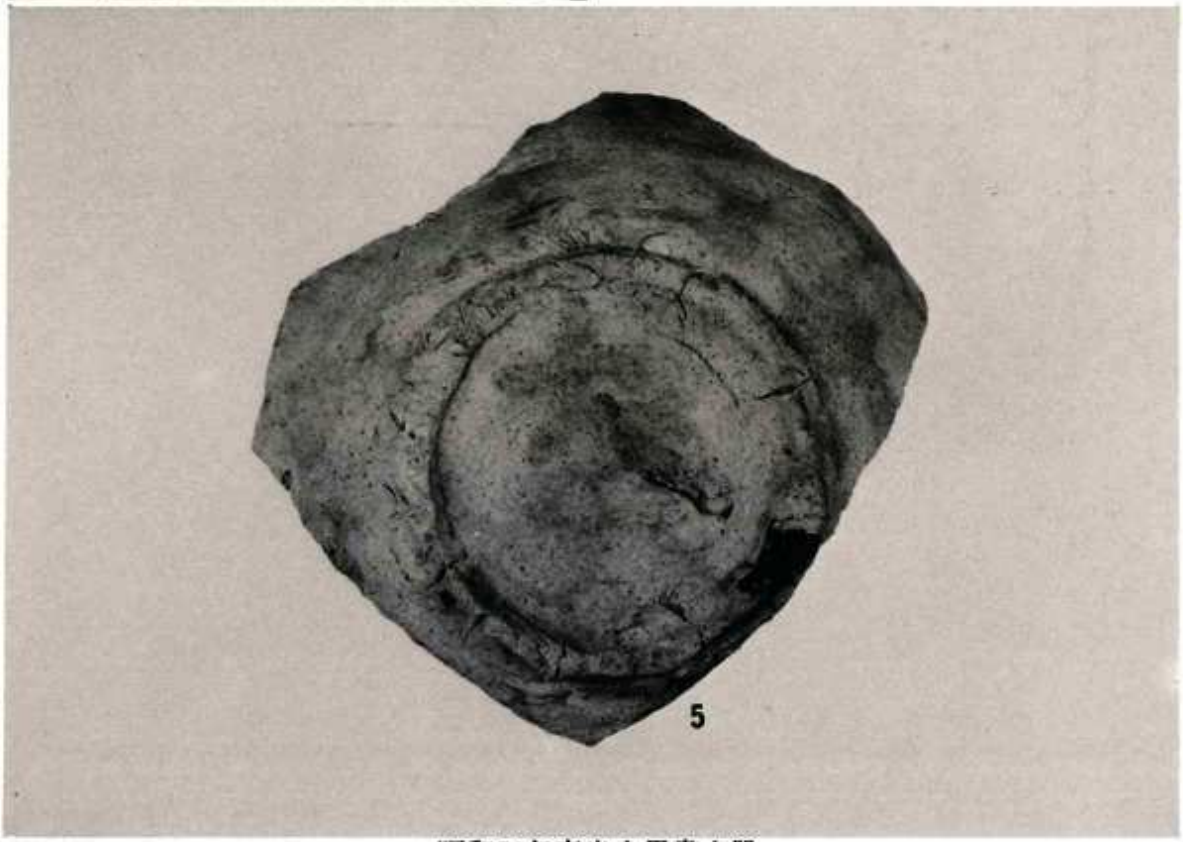
昭和54年度出土第Ⅰ群—d・e・g・h・i類・不明土器

図版11

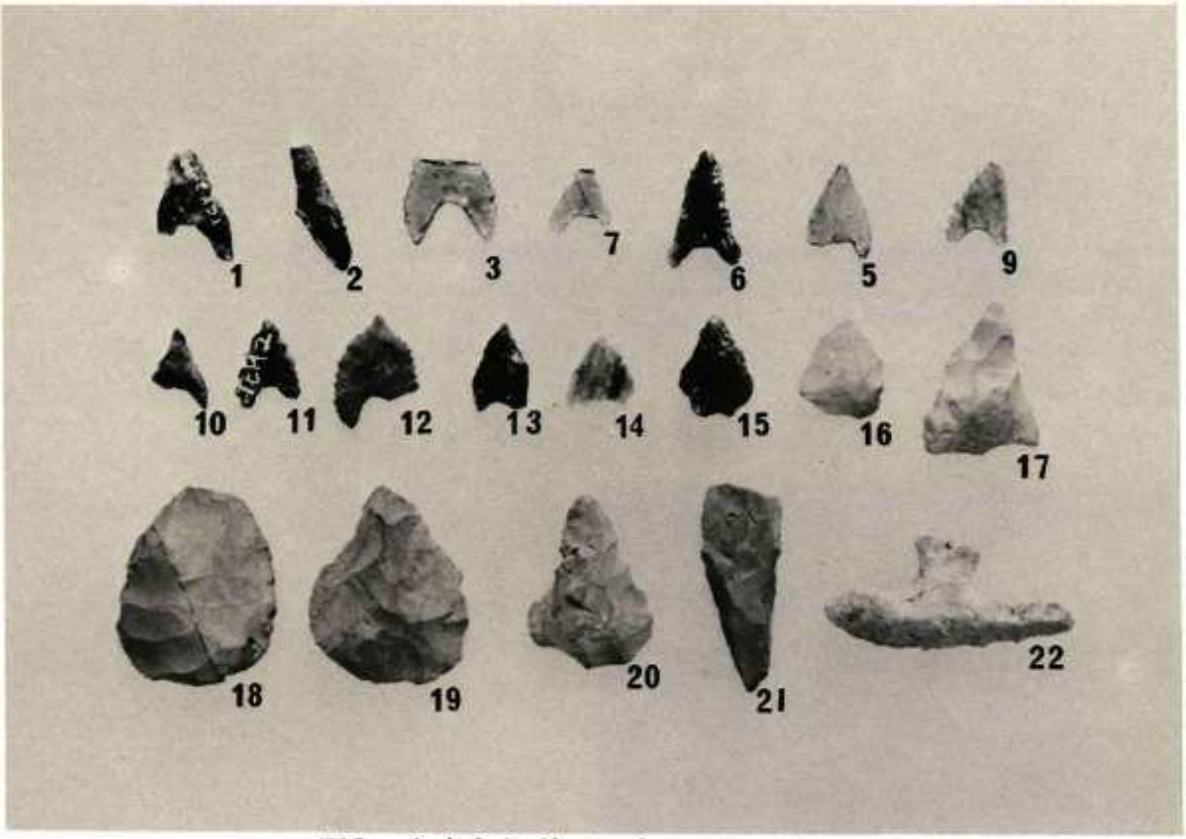


昭和54年度出土第II群一a類土器

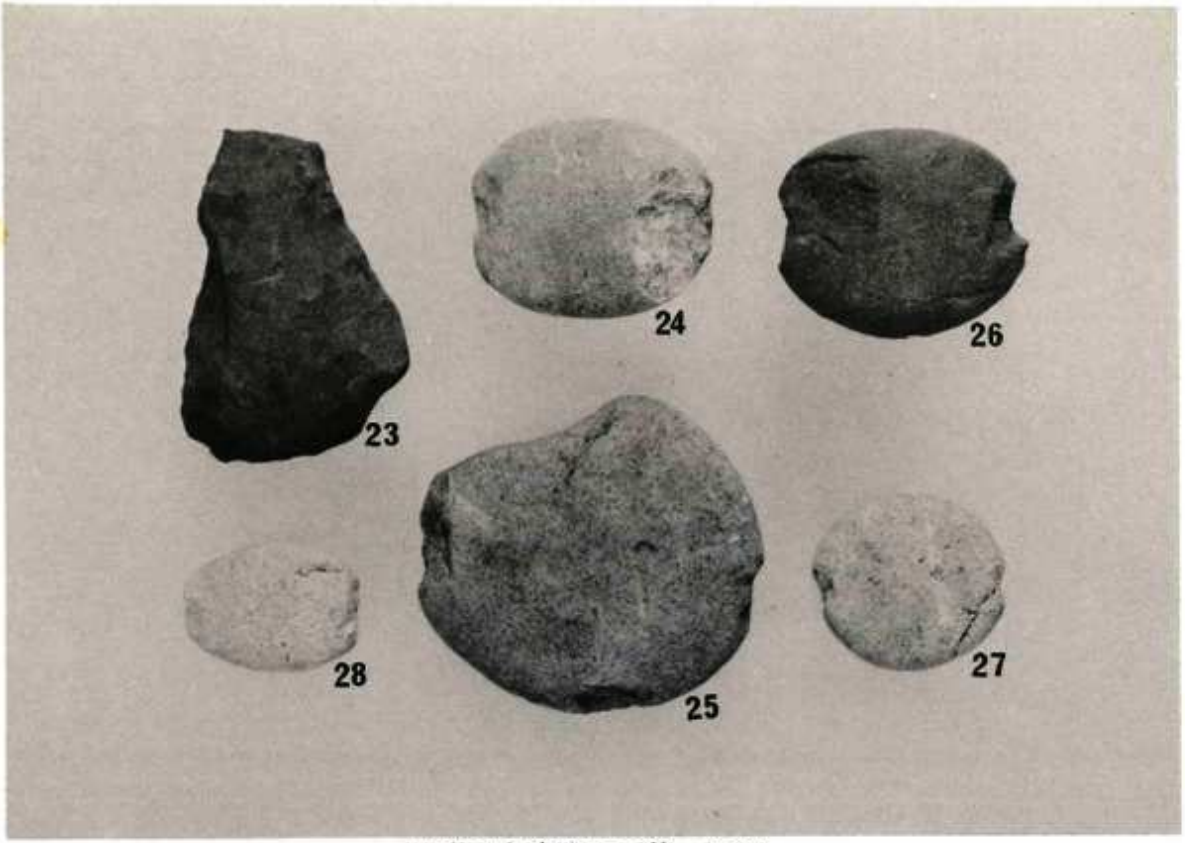
(赤外線ビデオ使用)



昭和54年度出土墨書土器



昭和54年度出土石鏃・石錐・スクレイパー



昭和54年度出土石斧・石錘

長 者 平 遺 跡

—昭和54年度緊急発掘調査概報—

1980年 3 月31日

発行　静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市高尾754—1

印刷　㈱開明堂　浜松市中沢町1—1

009